

市道高倉大善寺線道路改築事業関連

田 中 遺 跡

— 第 2 次 調 査 報 告 —

平成19年3月

福島県郡山市教育委員会
財団法人郡山市文化・学び振興公社



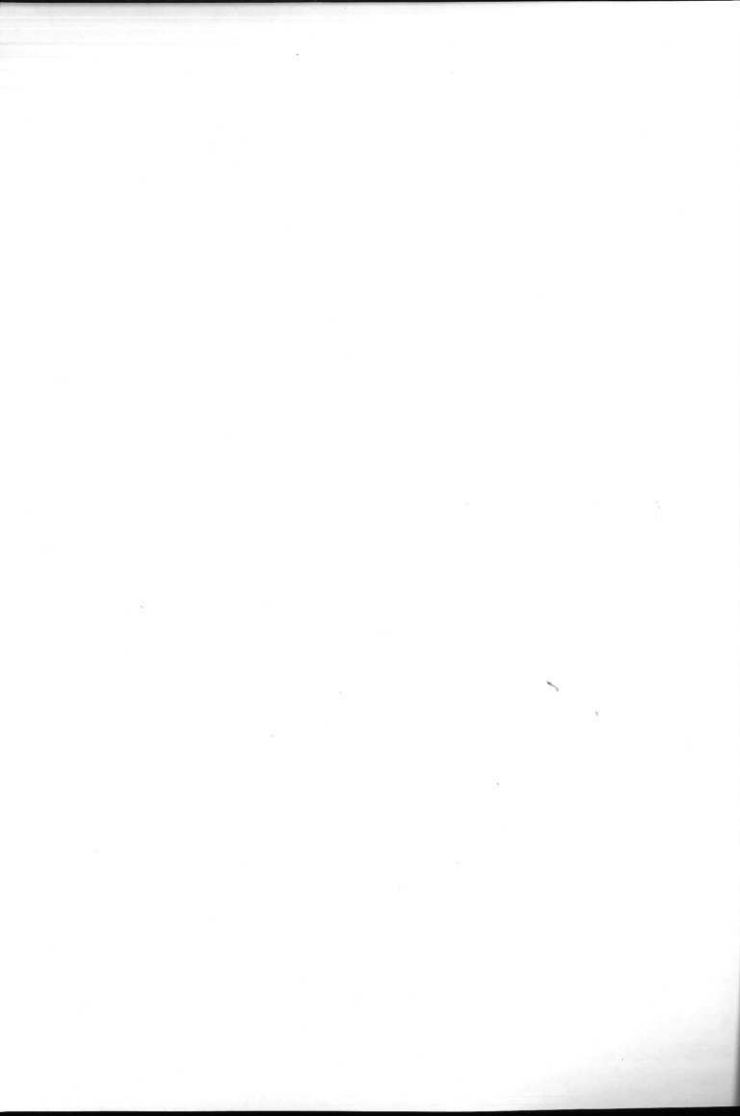
市道高倉大善寺線道路改築事業関連

田 中 遺 跡

— 第 2 次 調 査 報 告 —

平成19年3月

福島県郡山市教育委員会
財団法人郡山市文化・学び振興公社



序 文

文化財は、地域の歴史、文化を理解する上で、欠くことのできないものであり、また、地域文化の向上・発展の基礎となるものであることから、文化財を保存し、次世代に継承していくことは極めて大切なことであります。

私たちの住む郡山市は、大正13年（1924）に市制を施行して以来、合併や中核市への移行などを経て、東北有数の都市として現在も発展し続けております。

このような発展に伴い、近年、市内に約1,170箇所余り所在する埋蔵文化財包蔵地における開発が進み、貴重な埋蔵文化財の現状保存が困難な状況になってきております。

郡山市教育委員会では、本市の歴史や文化を解明する貴重な資料である埋蔵文化財を後世に残し、継承していくことは、現在に生きる私たちの大きな責務であるとの認識のもと、埋蔵文化財を含めた文化財の保存と活用に努めているところであります。

本年度、郡山市教育委員会では、市道高倉大善寺線道路改築事業に伴い、事業区域内に所在する「田中遺跡」の一部が消滅するために発掘調査を実施し、当該遺跡の記録保存を行いました。

本書は、今回の発掘調査によって発見された貴重な埋蔵文化財の記録保存の成果をまとめたものであります。

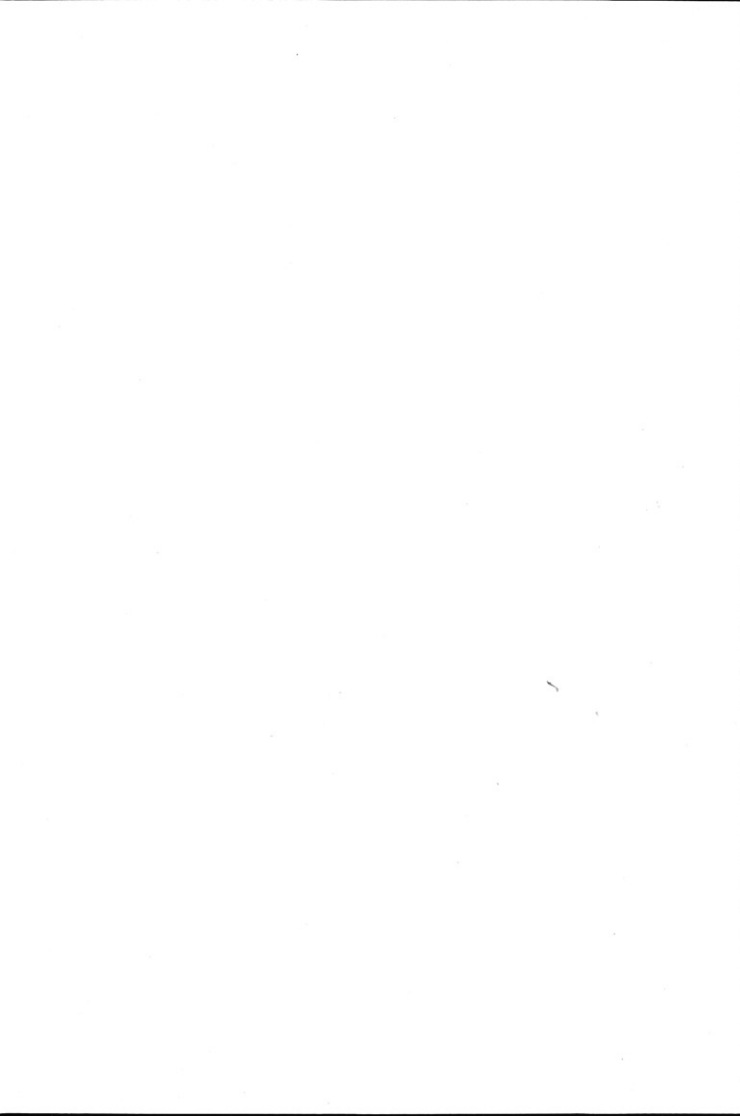
今後、地域の歴史解明の基礎資料や研究資料として、広く皆様に活用していただきますとともに、本書を通して、「埋蔵文化財の保存と活用」についてのご理解を深めていただければ幸いに存じます。

終わりに、発掘調査と報告書作成にご尽力をいただきました関係各位に対し、敬意を表しますとともに、感謝を申し上げ、序文といたします。

平成19年3月

郡山市教育委員会

教育長 木 村 孝 雄



調 査 要 項

遺 跡 名 田中遺跡（たなかいせき 0720301034）
所 在 地 福島県郡山市田村町小川字田中
調 査 期 間 平成18年8月2日～平成19年3月23日
調 査 面 積 3,298m²
調査主体者 郡山市教育委員会
調査委託者 郡山市建設部道路建設課
調査担当者 財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター
調 査 員 垣内和孝
調 査 協 力 遠藤久和・服部輝男・馬場七郎・吉田敬治・吉田長四郎

例 言

1. 本書は、郡山市田村町小川字田中に所在する田中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、市道高倉大善寺線道路改築事業に伴う記録保存のため実施した。
3. 調査費用は、郡山市建設部道路建設課が負担した。
4. 本書は、財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センターが編集し、郡山市教育委員会が発行した。
5. 本書の執筆は、第2章第1節を郡山市教育委員会文化課の高橋同仁、第3章第3節をバリノ・サーヴェイ株式会社、その他を財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター事業課の垣内和孝が行なった。
6. 遺構図・遺物図は、垣内と永久保美保が作成した。
7. 遺構図・遺物図の表現は慣例による。
8. 写真は、遺構・遺物を垣内、空中写真を日本特殊撮影株式会社が撮影した。
9. 座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅱ系による。
10. 本書に掲載した遺物には通し番号を付し、文章中では挿図2、あるいは2のように数字のみ表記する。
11. 遺物観察表の写真欄に○印のある遺物は、写真図版に写真が掲載されていることを示す。
12. 調査に関わる記録・資料および出土遺物は、郡山市教育委員会が保管する。

目 次

序 文

調査要項

例 言

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	1

第2章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至るまで	13
第2節 調査の経過と方法	14
第3節 調査成果の概要	16

第3章 調査成果

第1節 東側調査区の遺構と遺物	23
第2節 西側調査区の遺構と遺物	26
第3節 自然科学分析	46
第4節 考 察	48

参考文献

写真図版

挿図表一覽

- | | | | |
|------|--------------------------------------|-----|--------------|
| 第1図 | 遺跡の位置 | 第1表 | 周辺の遺跡 |
| 第2図 | 周辺の遺跡 | 第2表 | 東側調査区出土遺物観察表 |
| 第3図 | 遺跡の範囲と周辺の地形 | 第3表 | 西側調査区出土遺物観察表 |
| 第4図 | 調査区周辺の地形 | 第4表 | 樹種同定結果 |
| 第5図 | 七所神社経塚現況 | | |
| 第6図 | 七所神社経塚出土和鏡 | | |
| 第7図 | 試掘調査 | | |
| 第8図 | グリッドの設定 | | |
| 第9図 | 第1次調査の主要な遺構と遺物 | | |
| 第10図 | 東側調査区 | | |
| 第11図 | 西側調査区 | | |
| 第12図 | 東側調査区の遺構とその出土遺物 | | |
| 第13図 | 東側調査区遺構外出土遺物 | | |
| 第14図 | 2号竪穴住居とその出土遺物 | | |
| 第15図 | 3号竪穴住居 | | |
| 第16図 | 3号竪穴住居竈 | | |
| 第17図 | 3号竪穴住居出土遺物 | | |
| 第18図 | 5・6号掘立柱建物とその出土遺物 | | |
| 第19図 | 7・8号掘立柱建物 | | |
| 第20図 | 9・10号掘立柱建物・11号土坑 | | |
| 第21図 | 11・12号掘立柱建物・12号土坑 | | |
| 第22図 | 7～10号土坑・24～28号ピット・12～13号溝
とその出土遺物 | | |
| 第23図 | 1・2号炭窯 | | |
| 第24図 | 西側調査区遺構外遺物出土状況 | | |
| 第25図 | 西側調査区遺物出土傾向 | | |
| 第26図 | 西側調査区遺構外出土遺物 縄文・弥生土器 | | |
| 第27図 | 西側調査区遺構外出土遺物 土師器(1) | | |
| 第28図 | 西側調査区遺構外出土遺物 土師器(2) | | |
| 第29図 | 西側調査区遺構外出土遺物 土師器(3)・土製
支脚 | | |
| 第30図 | 西側調査区遺構外出土遺物 須恵器・鉄製品 | | |
| 第31図 | 掘立柱建物柱間寸法分布 | | |
| 第32図 | 掘立柱建物Ⅰ群・Ⅱ群 | | |

写真図版一覧

- 図版 1 (1) 東上空より望む東側調査区
(2) 上空より見下した東側調査区

- 図版 2 (1) 北上空より望む東側調査区
(2) 1号竪穴住居
(3) 3号土坑
(4) 5号土坑
(5) 6号土坑
(6) 東側調査区出土遺物 8・9

- 図版 3 (1) 西上空より望む西側調査区
(2) 上空より見下した西側調査区

- 図版 4 (1) 北上空より望む西側調査区
(2) 南上空より望む西側調査区

- 図版 5 (1) 清掃中の2号竪穴住居
(2) 2号竪穴住居
(3) 3号竪穴住居
(4) 掘込開始直後の3号竪穴住居
(5) 3号竪穴住居竪穴断面

- 図版 6 (1) 清掃中の3号竪穴住居
(2) 3号竪穴住居北壁際断面
(3) 3号竪穴住居木炭層確認状況
(4) 3号竪穴住居竈
(5) 3号竪穴住居煙道断面
(6) 3号竪穴住居煙道遺物出土状況
(7) 3号竪穴住居竈裁断面
(8) 3号竪穴住居竈右側遺物出土状況

- 図版 7 (1) 5号掘立柱建物
(2) 6号掘立柱建物
(3) 7号掘立柱建物
(4) 8号掘立柱建物
(5) 9号掘立柱建物
(6) 10号掘立柱建物
(7) 11号掘立柱建物
(8) 12号掘立柱建物

- 図版 8 (1) 7号土坑
(2) 8号土坑
(3) 9号土坑
(4) 10号土坑
(5) 11号土坑
(6) 12号土坑
(7) 1・2号炭窯
(8) 1・2号炭窯裁断面

- 図版 9 西側調査区出土遺物
10・17・18・19・21・60・85・86・98

- 図版10 (1) 西側調査区出土遺物107・108
(2) 軽石・炭化材

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

福島県域は、地形によって会津・中通り・浜通りの3地方に分けられ、郡山市は、そのうちの中通り地方のほぼ中央に位置する。奥羽山脈と阿武隈川が市域を南北に縦断しているため、市域はさらに、奥羽山脈西側の猪苗代湖南岸域、奥羽山脈東側の阿武隈川西岸域、同じく東岸域に3分される。

田中遺跡は、このうちの阿武隈川東岸域にある。同地域は、阿武隈山地が阿武隈川沿いまで迫っている場所が多いため山がちな地形となるが、阿武隈川支流の谷田川流域には平地が広がる。谷田川流域以外の多くの場所では、谷田川などの阿武隈川支流に注ぐ小河川や沢などによって、丘陵が樹枝状の複雑な地形に開析されている。このような丘陵地ではローム層は未発達であり、表土直下のロームや粘性土などには多くの砂礫が混入している。田中遺跡は、樹枝状に開析された丘陵上に所在する。

遺跡南前面の開析谷は、谷田川支流の前川によって開析されたものである。よって遺跡を水系により位置付けるとすれば、前川水系に属するといえる。谷田川流域の平地から田中遺跡までの距離は、およそ1.7kmである。

田中遺跡は郡山市田村町小川字田中に位置し、第1図に示したように、郡山市の中心街から南東へ約5～6kmほど離れている。周囲の市街化は進んでいないものの、近年実施された大規模な農地開発により、地形は大きく改変されている。発掘調査以前の調査区は、東側調査区が主に山林、西側調査区が荒地である。このうち後者は、荒地となる以前は桑畑であり、地形には改変が加えられている。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

谷田川の流域は、郡山市内でも有数の遺跡密集地である。近年の大規模農地開発などに伴い、発掘調査された遺跡も数多い。第2図と第1表に示したのは、田中遺跡周辺に位置する主要な遺跡である。丘陵の縁辺部に沿うように、多くの遺跡が占地する状況を見て取ることができる。

旧石器時代の遺跡は少ない。谷田川東岸の低位段丘上に立地する宮田A遺跡から後期旧石器が出土し、谷田川西岸の台地上に立地する弥明遺跡で後期のユニットが確認されたのみである。縄文時代には多くの遺跡から遺物が出土するようになるが、集落の確認できた遺跡は多くない。早期末から前期初頭の東山田遺跡、前期末の山中日照田遺跡、中期中葉から後期初頭を中心とした鴨打A遺跡や倉屋敷遺跡、後期から晩期の鴨打B遺跡などである。このうち鴨打A遺跡からは、おびただしい量の土器が埋没谷より出土しており、所謂捨て場を形成する。みつかった堅穴住居や貯蔵穴も多く、地域の核になるような集落の1つと考えられる。また、妻見塚遺跡や赤沼遺跡・北山田遺跡など、少なくない数の遺跡より狩猟用の落し穴がみつまっている。この地域の山林が、狩場として広範に利用されていたことがわかる。ただし多くの場合、落し穴は単独に近い状況であり、列状に並んだ事例はない。田中遺跡でみつかった落し穴も、これらの遺跡と同様に列状には並ばない。



第1図 道路の位置



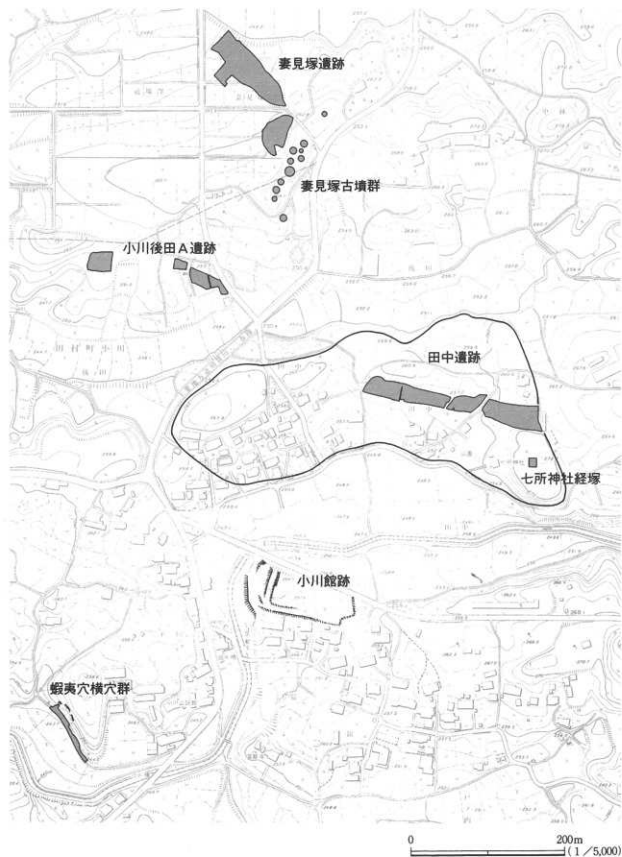
第2図 周辺の遺跡

第1章 位置と環境

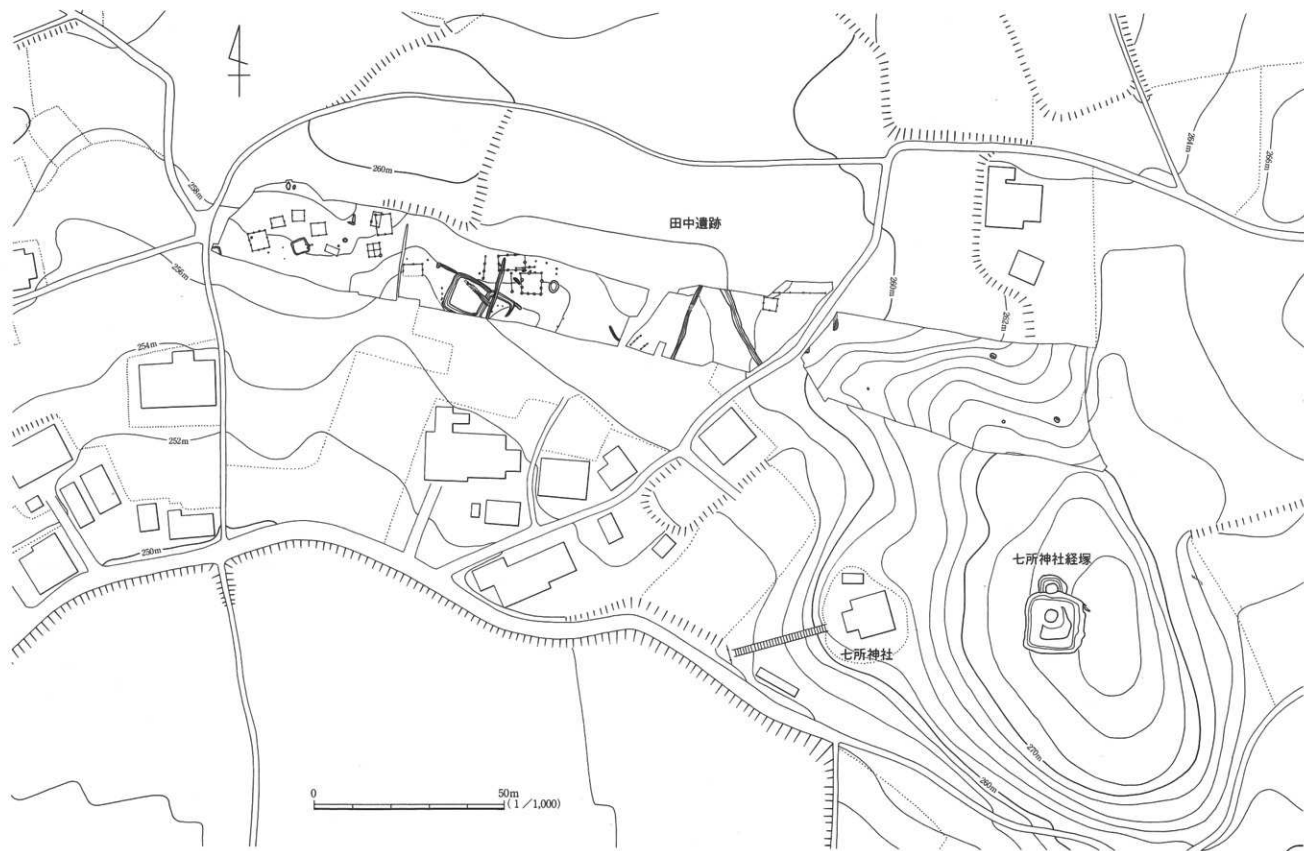
第1表 周辺の遺跡

番号	登録番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安
1	20300542	倉屋敷遺跡	中田町高倉		集落			
2	20301010	深田A遺跡	中田町赤沼					集落
3	20300539	赤沼遺跡	中田町赤沼		狩場			集落
4	20300540	赤沼館跡	中田町赤沼					
5	20300536	中井田C遺跡	中田町赤沼					集落
6	20300537	大島遺跡	中田町赤沼					集落
7	20300524	耕壇古墳群	田村町下行合				墳墓	
8	20300532	宮田A遺跡	田村町下行合	散布地			墳墓	
9	20301026	宮田B遺跡	田村町上行合					集落
10	20301025	宮田C遺跡	田村町上行合					集落?
11	20301027	宮耕地遺跡	田村町上行合					
12	20300567	亀河内供養塔	田村町上行合					
13	20301030	良耕地A遺跡	田村町上行合					
14	20301030	良耕地B遺跡	田村町上行合					
15	20301029	良耕地C遺跡	田村町上行合				集落	集落
16	20301028	良耕地D遺跡	田村町上行合					散布地
17	20300568	北山田古墳群	田村町上行合				墳墓	
18	20300568	北山田遺跡	田村町上行合		狩場		集落・墳墓	集落
19	20300573	城山館遺跡	田村町上行合				集落	集落
20	20300574	南山田古墳群	田村町上行合				墳墓	
21	20300579	南山田遺跡	田村町上行合				集落	集落
22	20300575	永作遺跡	田村町上行合				集落	集落
23	20301031	館遺跡	田村町手代木					
24	20300577	鴨打A遺跡	田村町手代木		集落・狩場		集落	集落
25	20300572	鴨打B遺跡	田村町手代木		集落			
26	20300583	妻見塚遺跡	田村町手代木		狩場		集落・墳墓	
27	20300584	妻見塚古墳群	田村町手代木				墳墓	
28	20300591	小川後田A遺跡	田村町小川		狩場			集落
29	20300593	七所神社群塚	田村町小川					
30	20301034	田中遺跡	田村町小川		狩場			集落
31	20300592	後田古墳群	田村町小川				墳墓	
32	20300629	蝦夷穴横穴群	田村町小川				墳墓	
33	20301045	小川館跡	田村町小川					
34	20300630	小川供養塔	田村町小川					
35	20300632	岡市供養塔	田村町小川					
36		戸ノ内供養塔	田村町小川					
37	20300635	聖人塚塚	田村町小川					
38	20300578	平館跡	田村町金屋					
39	20301035	大安場古墳群	田村町大善寺			集落	墳墓	
40	20300627	大善寺古墳群	田村町大善寺				墳墓	
41	20300628	山中日照田遺跡	田村町大善寺		集落		集落・墳墓	集落
42	20301040	中山田古墳群	田村町大善寺				墳墓	
43	20300633	山中供養塔	田村町山中					
44	20300634	上野遺跡	田村町山中				集落	集落
45	20300637	田村神社遺跡	田村町山中				集落	
46	20300638	善法院跡	田村町山中					
47	20300639	前田供養塔	田村町山中					
48	20301048	東山田塚群	田村町山中					
49	20301047	東山田遺跡	田村町山中		集落・狩場		集落	集落・墳墓
50	20300684	カガヤ垣古墳群	田村町山中				墳墓	
51	20300683	カガヤ垣A遺跡	田村町山中					集落
52	20300694	田向A遺跡	田村町守山					集落
53	20300695	田向B遺跡	田村町守山					集落
54	20300709	弥明遺跡	田村町守山	ユニット	狩場		集落	集落
55		守山藩陣屋跡	田村町守山					
56	20300696	守山城跡	田村町守山					
57	20301071	大供齋座三十三観音	田村町大供					
58	20301051	内荒井A遺跡	田村町金沢					散布地
59	20301050	内荒井B遺跡	田村町金沢					散布地
60	20301054	高屋敷B遺跡	田村町金沢					散布地

中世	近世	発掘調査年度	備 考
		昭和61	
		昭和61	
集落		昭和61	
城館			
		昭和61	
		昭和61	
集落?		昭和59	
集落		昭和59	
		昭和59	
集落?		昭和59	
石造物			北朝年号 応安3年(1370) 市史105
集落		昭和59	亀河内遺跡に含まれる
集落		昭和59	亀河内遺跡に含まれる
		昭和59	
		昭和52・60・62・63	
		昭和60・62・63	北山田古墳群に含まれる
城館		平成元	上行合館
		平成元	
		平成元	
		昭和60・61	
城館		昭和61	手代木館
		平成2・3・4・5	
		平成2	
		昭和60	
	墓地		
集落?		平成16	
経塚			和鏡出土
経塚?		平成17・18	
		平成13	
城館			
石造物			墨書 市史86
石造物			北朝年号 貞治4年(1365) 市史103
石造物			北朝年号 文和5年(1356) 市史85
塚?			消滅
城館?			小金銅仏出土
城館?		平成6・8・9・10・14・15・16	全長84mの前方後方墳を含む
		昭和56・平成10	
石造物			北朝年号 貞治4年(1365) 市史102 所在不明
		昭和56	
神社	神社		泰平寺と習合
	寺院		修験
石造物			応永8年(1401) 市史114
塚?		平成7	
		平成5・6・7	官衙風建物群
		平成2	
		平成元	
		平成元	
		平成3	
	陣屋		
城館	城館	平成12・13・14・15	蒲生期の石垣
	石造物		安永2年(1773)



第3図 遺跡の範囲と周辺の地形



第4図 溝堂区周辺の地形



郡山市域では、弥生時代の遺跡の調査例は少ないが谷田川流域は例外で、大安場古墳群などで集落が確認されている。出土量は僅少ながらも、田中遺跡や小川後田A遺跡からも弥生時代中期の土器が出土しており、周辺に集落の営まれていた可能性がある。

古墳時代になると、大安場古墳群で前期の大型前方後方墳である大安場1号墳が造営される。全長が84mある大安場1号墳は、前方後方墳としては東北地方で最大規模である。この古墳は、前川が谷田川へ注ぐ地点近くの丘陵上に築造されており、その占地は、あたかも前川水系を抑えるように選択されているようにも感じられる。谷田川の支流である前川には、多数の支流や沢があって流域面積が広く、前川水系に立地する遺跡も多い。田中遺跡もそのうちの1つである。

前川とこれに注ぐ支流や沢は、田村町の大善寺から山中・小川・手代木・上行合におよぶ丘陵を複雑に開析し、これらの開析谷に面した丘陵上には、古墳時代の多くの遺跡が存在する。古墳では、中期後半の大善寺古墳群や南山田古墳群・大安場古墳群など、後期から終末期の妻見塚古墳群や蝦夷穴横穴群などがある。大善寺古墳群や南山田古墳群・大安場古墳群が、前川水系の開析谷と谷田川とに挟まれた丘陵上に占地するのに対し、妻見塚古墳群や蝦夷穴横穴群は、開析谷の奥まった場所に造営されている。集落でも古墳と似たような傾向が認められ、山中日照田遺跡や南山田遺跡・永作遺跡など、集落の盛期が前期や中期に遡る集落の多くは、前川水系の開析谷と谷田川とに挟まれた丘陵上に占地し、鴨打A遺跡や妻見塚遺跡など、後期から終末期を中心とした集落は、開析谷の奥まった場所に位置する。ただし鴨打A遺跡や妻見塚遺跡では、前期の小規模な集落も確認されている。

集落のほとんどは、継続期間が断続的であるのに対して、山中日照田遺跡では古墳時代の全時期を通じて集落がほぼ継続する。同遺跡の集落が、地域の拠点となる存在であったことが予想できる。山中日照田遺跡は大善寺古墳群と複合し、大安場古墳群の築造された丘陵とは、前川を挟んで対岸に位置する。大善寺古墳群中の古墳には埴輪を伴うものがある。谷田川流域の古墳群で埴輪が出土するのは大善寺古墳群のみであり、この古墳群は地域の核になるような集団の墳墓であったと考えられる。

郡山市域は、古代の行政区画では安積郡に属する。そのうち田中遺跡周辺の地域は、安積郡を構成する郷の1つである小川郷に属していたと考えられ、旧村名である小川は、その遺称地名とみられる。現地では、小川を正式読みのコガワではなく、コガと短縮して呼称することが多い。

奈良時代になると、田中遺跡や小川後田A遺跡で集落が営まれるようになる。この時期には広範な地域で集落が出現するようになり、続く時期の平安時代には、そのような傾向がさらに顕著となる。これまで集落の営まれなかった山間地にも集落が進出する。発掘調査は実施されていないが、内荒井A・B遺跡や高屋敷B遺跡などは、そのような平安時代の集落と考えられる。また、黒石川流域に位置する東山田遺跡は、奈良時代から平安時代にかけて継続した大規模な集落で、その一画からは官衙的な様相を持つ建物群が見つかった。その評価は確定していないものの、地域の核になるような集落の1つであったことは疑いない。

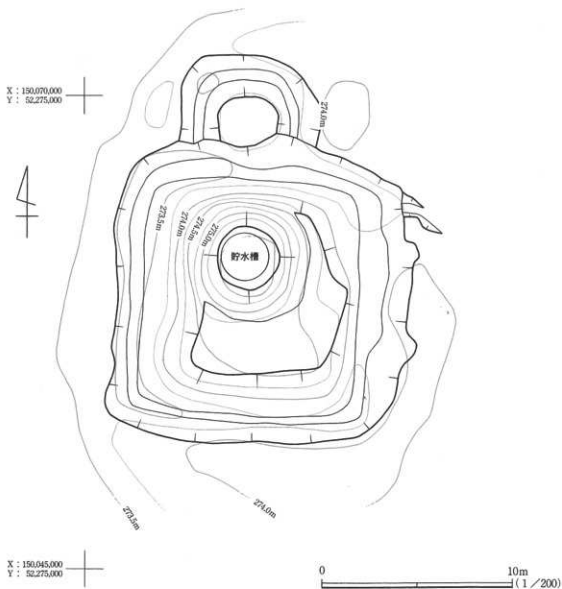
中世になると、阿武隈川東岸の地域は田村荘となって安積郡から分立する。大滝根川沿いの丘陵上に立地する赤沼遺跡や、谷田川の低位段丘上に立地する宮田A・B遺跡や良耕地A・B遺跡などで鎌倉時代の集落が確認されている。後者に近接する亀河内供養塔には、南北朝時代の応安3年(1370)の紀年銘がある。田中遺跡周辺の小川や手代木にも多くの供養塔があり、戸ノ内供養塔には文和5年(1356)、



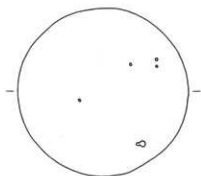
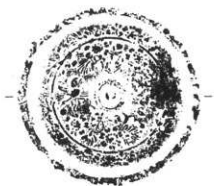
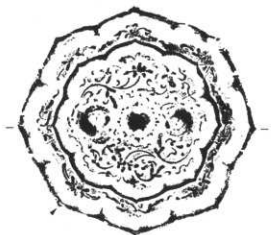
後山



経塚の現況



第5図 七所神社経塚現況



第6図 七所神社経塚出土和鏡

岡市供養塔には貞治4年(1365)の紀年銘が認められる。

田中遺跡の範囲内には、12世紀頃に築造されたとみられる経塚がある。この経塚は、後山と呼ばれる小山の頂上付近に西面するようにして立地し、七所神社経塚の名称で遺跡登録されている。塚の上には、昭和37年頃に敷設された簡易水道の貯水槽が設置されており、後世に改変されたことは間違いないが、周溝は良好に遺存する。第5図に示したように、現況での平面形は南北にやや長い方形で、規模は内寸で東西約11.5m、南北約12.5mである。この本体部分の北には方形の小区画が接続する。

この経塚からは、昭和初期頃に第6図に示した和鏡が出土している。出土状況の詳細は不明ながら、聞き取りによれば、石組状の施設の中から鉄製の刀剣類と一緒に出土したらしい。瑞花双鳥八棱鏡は、亀裂が入り若干歪む。鏡胎は厚く、界圈は八棱形である。鏡面には六尊曼荼羅の仏像が毛彫りされているが、摩滅により観察できない部分が少なくない。円鏡は鏡胎が薄く、複数の穿孔がある。周縁は外傾気味に立ち上がり、幅は約4mmである。花蕊座鈕で太めの界圈がある。鏡背文様は鏝や摩滅で不鮮明であるが、花卉や双鳥が描かれている。

田中遺跡の第1次調査でみつかった方形区画溝は、区画内は完全に削平されていたものの、溝の堆積土の状況から、中心となる区画内には盛土が存在していた可能性が高い。方形の小区画が接続する形状は七所神社経塚と類似し、同様の遺構と考えられる。後山の周辺が、小川地区の中の宗教的な空間であったことが窺え、そのような後山をめぐる信仰が、現在鎮座している七所神社の信仰に繋がっていきと考えられる。小川地区における後山の位置が、鬼門の方角である北東にあたることも興味深い。

谷田川沿いの低位段丘上に立地する田村神社遺跡や善法院跡には、熊野修験に関わる泰平寺があったと伝えられている。この辺りの旧村名である山中は、泰平寺などの境内地であることに因むという。今も鎮座する田村神社は、田村荘の領主である田村氏の篤い崇敬を受け、神仏混交の中世においては、泰平寺と一体の存在であったと考えられる。田村氏の本拠は、永正元年(1504)に三春へ移る以前は、山中の南に隣接する守山にあったと伝えられており、山中から守山にかけての谷田川流域が、田村荘の中心地の1つであったことがわかる。

戦国時代になると、おおむね旧村ごとに山城が築かれる。小川村の小川館跡もそのうちの1つとみられ、前川の屈曲部に突き出た丘陵上に占地する。後世の開発などによって多くが失われ遺存状態は悪いが、現況や地割の状況などから、南北50mほどの規模を持つ方形もしくは長方形の平面をしていたと推測できる。発掘調査が実施された館遺跡は手代木村、同じく城山館遺跡は上行合村の山城である。

旧村ごとに存在した山城のほとんどは、遅くとも天正18年(1590)の奥羽仕置以前には廃城になった。奥羽仕置は奥羽地方を中世から近世へと展開させ、田村地域の拠点城館の1つであった守山城は、豊臣大名である蒲生氏によって石垣や礎石建物を持つ近世的な城に大改修された。守山城跡からは、複数回におよぶ入念な破却の痕跡が確認され、そのうちの最終時の破却は、元和元年(1615)の一国一城令によるとみられる。元禄13年(1700)、田中遺跡周辺の小川や手代木は、水戸藩の支藩である守山藩領となり、そのまま幕末を迎える。守山城跡の本丸には城山八幡宮が勧請され、守山宿の一面には守山藩の陣屋が置かれた。田中遺跡のある場所は、江戸時代には小川村に属した。

近現代の小川村は、周辺の村々との合併をくり返した後、昭和40年に郡山市に吸収合併される。今日の行政区画では、郡山市田村町小川に属する。

第2章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至るまで

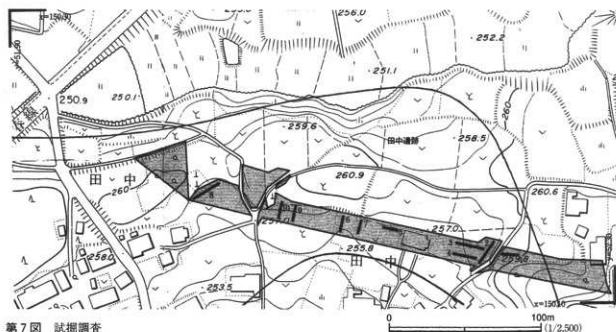
田中遺跡は、県道須賀川三春線の東側に位置する埋蔵文化財包蔵地で、平安時代の散布地として周知されている。また、同遺跡の南東部分には、七所神社経塚が重複して所在する。

市道高倉大善寺線改築事業に伴い、郡山市田村町小川字田中地内に所在する田中遺跡の一部が開発対象となるため、郡山市建設部道路建設課から郡山市教育委員会文化課に試掘確認調査の依頼があった。郡山市教育委員会文化課は、平成17年3月1日から3月2日にかけて、7,676㎡を対象に試掘確認調査を実施した。その結果、住居跡、ピット、溝跡などの遺構や土師器片等の遺物が、調査区全体に検出され、遺跡の所在が確認されたことから、調査区7,676㎡を要保存範囲とした。

これに伴い、郡山市建設部道路建設課と郡山市教育委員会文化課との保存協議により、道路建設用地となる7,676㎡について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査計画は、調査期間を平成17年度から平成19年度までの3カ年とし、調査区を年度毎に分けて実施することとした。平成17年度は、開発区域の中央部分2,352㎡の第1次調査を実施して、田中遺跡発掘調査報告書を刊行した。今回は、開発区域中、第1次調査区の東側部分及び西側部分を調査対象とした第2次調査で、対象面積は3,298㎡である。

郡山市教育委員会は、平成18年8月2日付けで、財団法人郡山市文化・学び振興公社に発掘調査を委託した。委託期間は平成18年8月2日から平成19年3月23日として、屋外業務は平成19年2月20日に終了し、整理業務は平成19年3月23日報告書刊行をもって終了した。本報告書は、その発掘調査による成果をまとめたものである。



第7図 試掘調査

第2節 調査の経過と方法

第2次調査区は、第1次調査区の東側と西側に分かれているため、前者を東側調査区、後者を西側調査区と呼称することとした。調査面積は、両調査区あわせて3,298㎡である。8月10日より下草刈りを開始し、お盆休み明けの23日より重機を用いて表土剥ぎを行なった。表土剥ぎは東側調査区から始め、その終了に引き続いて西側調査区についても行なった。両調査区の表土剥ぎが終了したのは9月12日である。排土は、第1次調査区であった場所に仮置きした。

作業の手順は、まずは主に鋤簾を使用して検出面の粗削りをし、その上で移植などを用いて遺構確認のための精査を進め、確認した遺構の掘り込みには原則として移植を用いた。遺構の記録化は写真と図面で行なった。写真はカラーリバーサルとモノクロームのフィルムを用いて撮影し、図面は20分の1の縮尺で作成することを原則とした。遺構の断面図化には標高を用い、平面の図化については第8図に示した方法で設定したグリッドを基準とした。遺構外から出土した遺物についても、このグリッドを基準に取り上げた。標高値や座標値は、いずれも道路建設用の杭から移動した。使用した座標値は日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系による。

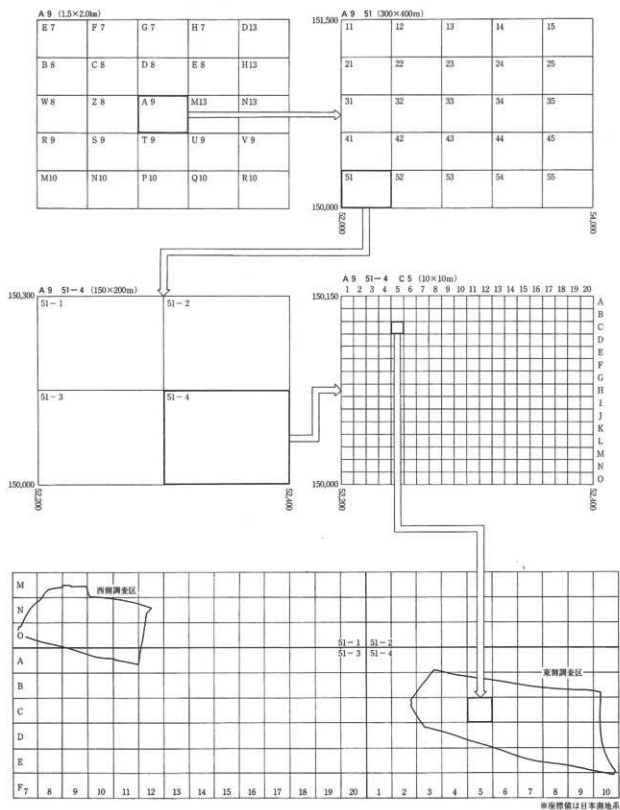
調査は、面積の広い東側調査区より始めた。表土剥ぎ終了前の8月29日より作業員を導入し、本格的な発掘作業を開始した。東側調査区内の東側より西方へ向かうようにして、既述した手順でグリッドごとに作業を進めた。東側調査区は北向きの斜面であることもあり、確認した遺構は少なく、作業は順調に進捗した。東側調査区の作業が終了したのは10月5日である。

西側調査区の発掘作業は10月10日に開始した。西側調査区内の西側より東方へ向かうようにして、既述した手順でグリッドごとに作業を進めた。南向きの緩やかな斜面である西側調査区からは比較的多くの遺構がみつかり、埋没谷からも多くの遺物が出土した。埋没谷には第1次調査からの連番で番号を付し、遺物の取り上げに際しての層位はLⅡとした。第2次調査における土層の層序は、表土・耕作土がLⅠ、埋没谷の堆積土がLⅡ、地山がLⅢである。LⅡの細分も可能であったが、層位ごとの遺物の様相差などが認められなかったため一括した。発掘作業と並行して、七所神社経塚の現況を確認するために測量調査を実施した。七所神社経塚は、田中遺跡の中に含まれており、田中遺跡を考える上で欠くことのできない存在である。

発掘調査成果の普及活動の一環として、11月11日に埋没谷の掘り込みを中心に発掘体験を実施する予定であったが、降雨のため19日に延期となった。当日は親子連れを中心に多くの市民の参加があり、発掘の体験とともに、調査成果の現地説明と七所神社経塚の見学を行なった。

調査は順調に進捗していたが、他遺跡の発掘調査に緊急的に対応しなければならなくなり、12月1日から調査を中断した。翌年の1月23日に調査を再開し、31日にはラジコンヘリコプターを用いて空中写真撮影を行ない、2月5日に発掘作業を終了した。調査区の埋め戻しを6日から20日にかけて行ない、調査に伴う屋外作業が全て終了した。

整理作業は出土遺物の水洗い・注記などといった基礎的な作業については屋外作業と並行して進めたが、本格的には屋外作業終了後に行なった。



第8図 グリッドの設定

第3節 調査成果の概要

平成17年度に実施した第1次調査では、掘立柱建物4棟、柱列6条、溝10条、土坑2基、ビット23基、埋没谷3ヶ所を確認し、主に奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土した。掘立柱建物や柱穴・土坑の多くは、奈良・平安時代のものである可能性が高く、田中遺跡の所在する丘陵上に古代の集落の営まれていたことが判明した。溝のうち、2号溝は方形区画を形成するようにめぐり、その規模は内寸で東西約9m、南北約8.5mである。この区画を形成する溝の堆積土の様相は、区画内に盛土が存在していたことを示し、この方形区画が塚状の施設であったことを窺わせる。この方形区画には、東側と西側に規模の小さい方形区画が接続する。調査区外になるため不明瞭ながら、南側にも溝が接続しており、方形区画がさらに接続していた可能性がある。この塚状の方形区画の性格について確かなことは不明ながら、溝の堆積土中より13世紀前葉を中心とした時期のかわらけが多量に出土しており、非日常的な施設であったと指摘されている。

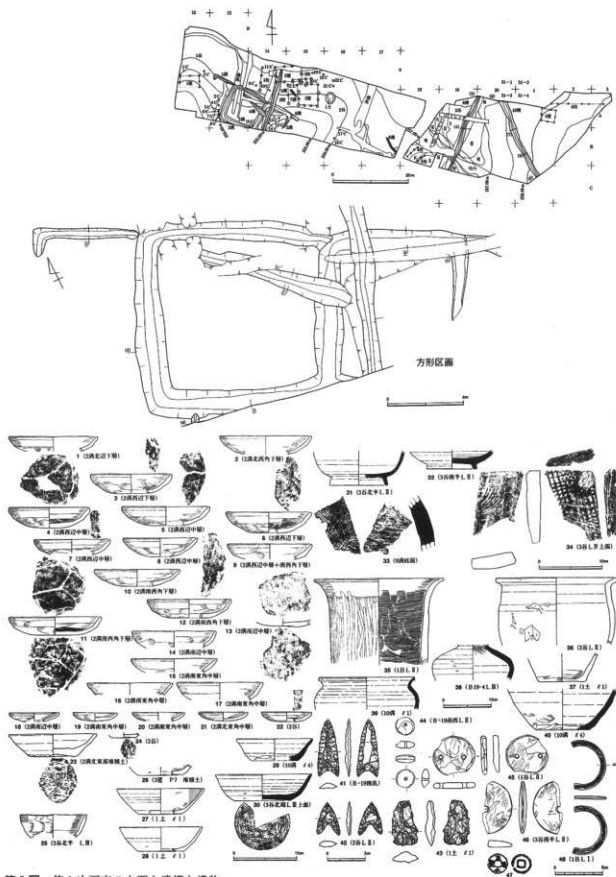
2号溝を中心とした方形区画は、第1章第2節で紹介した七所神社経塚の形状と類似し、1つの可能性として、これが経塚であったことも考えられる。この方形区画は、七所神社経塚よりも規模がひとまわり小さく、出土遺物の年代観からは、七所神社経塚よりも後に築造されたと予想できる。2号溝を中心とした方形区画は、後山の頂上付近に築造された七所神社経塚を意識して、築造場所を選択しているようにもみうけられる。後山の南西山腹には七所神社が鎮座しており、後山一帯が宗教的な空間であったことが窺える。

第1次調査区の東端付近と、第2次調査の東側調査区西端付近からは、奈良時代のものと思われる瓦片が複数出土した。複数の瓦片の存在は、周辺に瓦を焼成した窯か瓦を葺いた施設が存在していたことを示す可能性がある。後山一帯が宗教的な空間であったとするならば、周辺には古代寺院が存在していたかもしれない。

第2次調査の東側調査区は、第1次調査区の東に隣接し、七所神社経塚の築造された後山の北斜面にあたる。既述したように調査区の西端付近から奈良時代の瓦片が2点出土した。確認した遺構は、堅穴住居が1棟、土坑が4基、溝が1条で、出土遺物は僅少である。

唯一の堅穴住居である1号堅穴住居は、堅穴の南東コーナー部分を僅かに確認したのみであるため、詳細は不明である。ただし、壁溝がしっかりと掘り込まれていることや、周辺から出土した遺物などから、奈良時代のものである可能性がある。1号堅穴住居が構築された場所は、東側から迫り出してきた小尾根の稜線上にあたる。この場所は、全体的には北斜面である東側調査区の中では、例外的に南向きの緩斜面を形成している。1号堅穴住居は、居住適地を選択しているといえる。

土坑のうち、3・4号の2基は落し穴とみられ、いずれも埋没谷の縁辺に存在する。両者は比較的近接して位置するものの、堆積土の様相は全く異なり、同時期のものとは考え難い。3号土坑は、最上層にHr-FPが純層に近い状態で堆積しており、これが降下したとされる6世紀中頃には半ばまで埋没していたことが判明した。落し穴の築かれた時期を示す決定的な情報は得られなかったが、周辺から石鏃が出土していることや、他遺跡の事例などから縄文時代のもと考えられる。



第9図 第1次調査の主要な遺構と遺物

溝についてもその時期を示す情報は得られなかったが、形状や堆積土の様相などから、近世以降の比較的新しい時期が想定できる。区画や排水を目的とした施設であろう。

西側調査区は、第1次調査区の西に隣接する。南向きの緩やかな斜面で、居住適地である。調査区内には、1谷・4谷とした2ヶ所の埋没谷がある。確認した遺構は、竪穴住居が2棟、掘立柱建物が8棟、土坑が4基、ピットが5基、溝が2条、炭窯が2基である。1谷と3号竪穴住居からは、奈良・平安時代の土師器を中心に、比較的多くの遺物が出土した。

竪穴住居のうち、2号は奈良時代、3号は平安時代のものである。2号竪穴住居は、北東コーナー周辺を確認したのみであるが、しっかりとした柱穴と壁溝があり、奈良時代の定型的な竪穴住居と想定できる。一方で3号竪穴住居は、柱穴がなく、壁溝も弱々しい。2号の壁溝は排水機能を兼ねていたと考えられるが、3号のそれは上屋などを支えるための壁板材の痕跡の可能性がある。第1次調査区では竪穴住居は未確認だったが、第2次調査で3棟の竪穴住居を確認したことにより、奈良・平安時代の田中遺跡の集落が、掘立柱建物だけでなく竪穴住居によっても構成されていたことが判明した。ただし、第1次調査区で確認した掘立柱建物群と、今回確認した竪穴住居とはやや位置が離れており、所属する遺構群は異なるようにみうけられる。

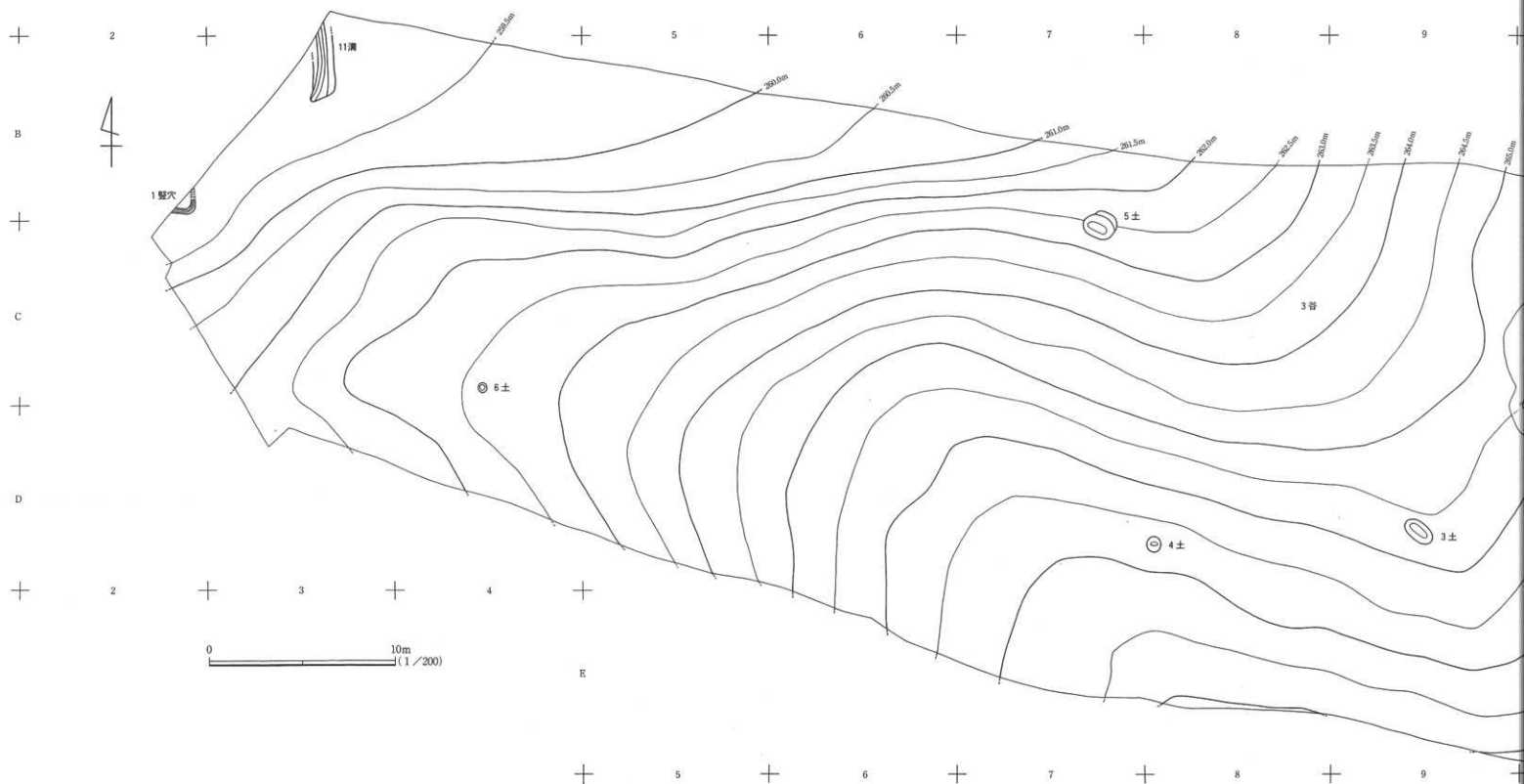
12・13号溝とした遺構は、溝と判断したものの長さが短く、区画や排水のための施設とは考え難い。両溝の形状や位置関係、13号から奈良時代の遺物が出土したこと、13号の堆積土に焼土や木炭が含まれていることなどから、1つの可能性として、竪穴住居の壁溝や掘形の痕跡であるかもしれない。

掘立柱建物は、一般的にその構築時期を判断するのが難しく、西側調査区で確認した5～12号掘立柱建物も同様である。6・7・8・10・12号の柱穴からは土師器や須恵器の破片が出土しており、これらの掘立柱建物が奈良・平安時代以降の構築であることは間違いない。5号の柱穴から出土した土器片は、細片のため判断に迷うが、かわらけの可能性はある。

建物の主軸方位を基準とすれば、8棟の掘立柱建物は、西に傾く5・6・7・9・10・12号と、東に傾く8・11号とに大別できる。前者は一般的な柱間構造であるのに対し、後者は1間1間の長方形という特異なものである。柱穴の形状も、前者が方形基調であるのに対して後者は円形基調であり、柱穴の規模も、前者と比較して後者は極端に小さい。このような属性の違いは構築時期の差を反映している可能性がある。これらの掘立柱建物の時期を示す決定的な情報は得られなかったが、前者については奈良・平安時代以降で、5号出土土器の観察・判断が妥当であれば、中世の可能性はある。

第1次調査で確認した1号掘立柱建物は、5・6・7・9・10・12号と柱穴の形状が類似し、位置も近接していることから一連の建物群と把握できる。この1・5・6・7・9・10・12号のうち、12号のみは総柱構造である。掘立柱建物に関する一般的な理解に従えば、12号は倉庫であった可能性が高い。また、これらの建物の中では7・10号の2棟は柱間数が多く、比較的大規模である。7・10号は建物群の中心となる施設であったと予想でき、一連の建物群を、1・7・12号のグループと5・6・9・10号のグループに分けて捉えることが可能である。

土坑やピットは性格を明確にし得ないが、10号掘立柱建物内にある11号土坑は、10号掘立柱建物と一連の遺構として把握する必要があるかもしれない。また、1・2号炭窯は、その形状から近代以降に操業されたものと考えられる。



第10图 东测调查区



9

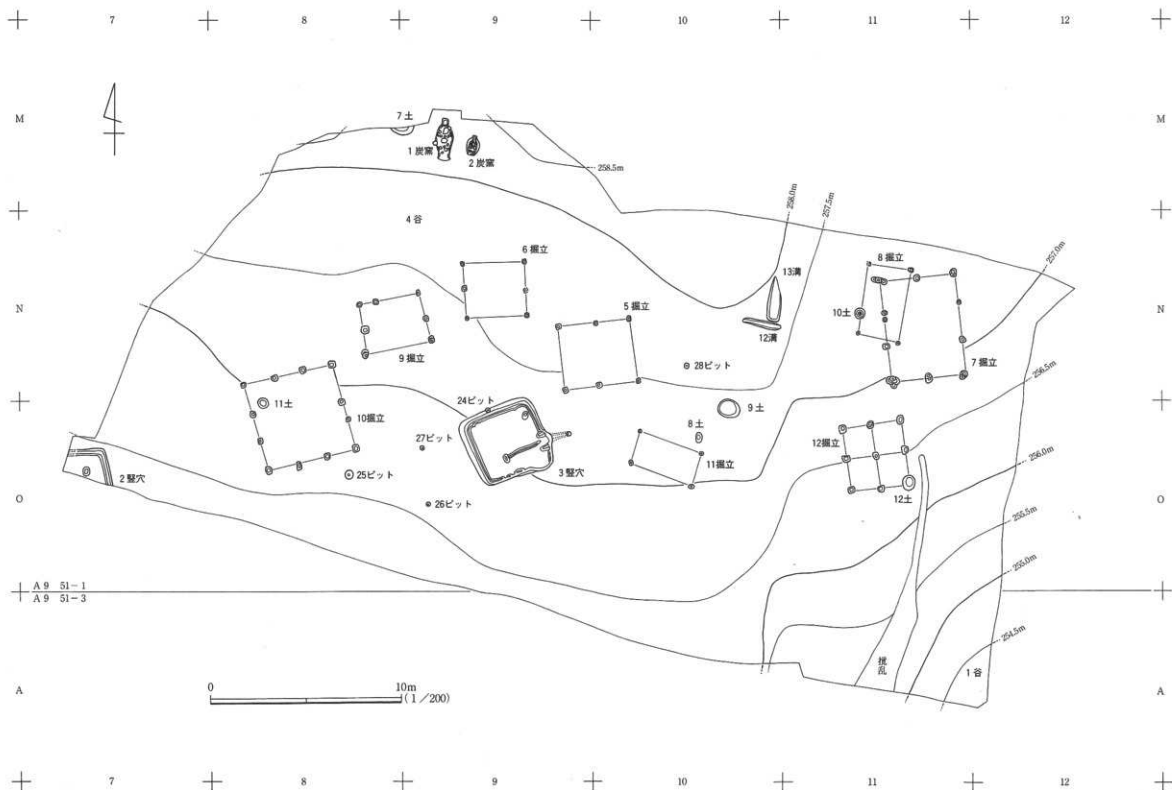


10



9





第11図 西側調査区

第3章 調査の成果

第1節 東側調査区の遺構と遺物

東側調査区は、大半が北向きの斜面で、調査区の北縁辺から南東コーナー付近にかけて3谷とした埋没谷がある。確認した遺構は、竪穴住居が1号の1棟、土坑が3～6号の4基、溝が11号の1条である。出土遺物は僅少で、遺構内・遺構外出土のものをあわせて、縄文土器片が2点、土師器片が42点、須恵器片が11点、瓦片が3点、石鏃が1点である。

1号竪穴住居は、調査区西端のB2グリッドで確認した。この場所は、北斜面から派生した支尾根の稜線上であり、北向きの斜面が大半を占める東側調査区の中では居住適地である。南東コーナー部分のみが調査区内で、その他は調査区外である。しっかりとした壁溝が掘り込まれていることから、竪穴住居と判断した。堆積土は暗褐色土の均一層である。遺物は出土しなかった。

3号土坑は、調査区東側のD9グリッド、3谷の縁辺で確認した。上面の平面は長円形、底面の平面は長方形を基調とする。堆積土は8層に分けることができ、自然堆積と判断した。このうち最上層の⑧1は、自然科学分析によりHr-FPの堆積層であることが判明した。形状と立地から落し穴と考えられる。堆積土中より縄文土器片が1点出土したが、細片のため詳細は不明である。

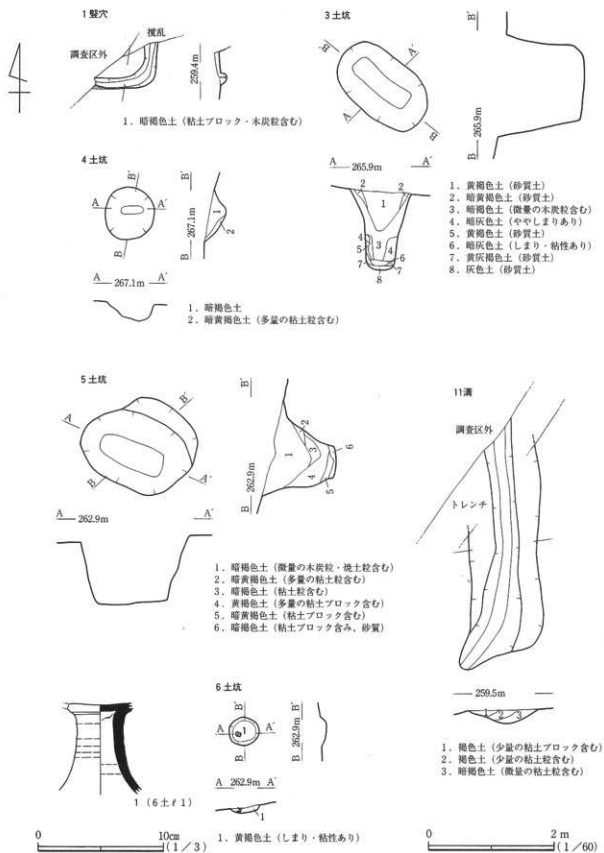
4号土坑は、調査区東側のD8グリッド、北向き斜面の上部で確認した。上面の平面は円形、底面の平面は長円形を基調とする。堆積土は2層に分けることができ、自然堆積と判断した。壁の立ち上がり具合は不整であり、上面形と底面形が不調和であることから、土坑としたものの意図的に掘り込まれた遺構ではない可能性もある。遺物は出土しなかった。

5号土坑は、調査区東側のB・C7グリッド、3谷の縁辺で確認した。上面の平面は長円形、底面の平面は長方形を基調とする。斜面の谷側にあたる北東部分の上面が少し崩れている。堆積土は6層に分けることができ、自然堆積と判断した。形状と立地から落し穴と考えられるが、3号土坑とは堆積土の様相が異なっており、構築された時期は違うとみられる。遺物は出土しなかった。

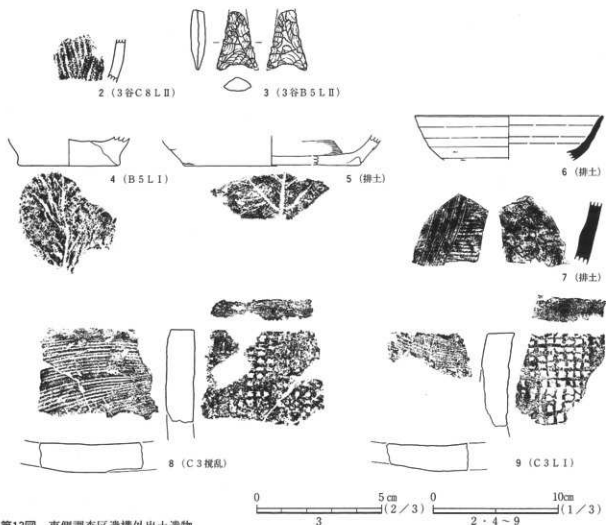
6号土坑は、調査区西側のC4グリッド、西北西方向に伸びる稜線の頂部で確認した。平面は上面・底面ともに円形を基調とする。深さが極めて浅く、土坑としたものの意図的に掘り込まれた遺構ではない可能性もある。堆積土は黄褐色土の均一層である。堆積土中より、挿図1の須恵器の高坏もしくは高盤の脚部が出土した。

11号溝は、調査区北西部のB3グリッド、3谷の中で確認した。南北方向に続き、確認した南端部が南西方向に屈曲する。東西の両壁がテラス状の平場を形成して立ち上がることから、複数回の改修が考えられる。遺物は出土しなかったものの、奈良時代の遺物を包含する3谷を掘り込んでいることと、形状や堆積土の様相などから、近世以降の比較的新しい時期のものと考えられる。

遺構外出土遺物の多くは、3谷の堆積土であるLⅡから出土した。中でもC8やB6グリッドからの出土が多い。また、調査区南西部のC3グリッドからは、挿図8・9の奈良時代の瓦片が出土した。両者は凸面の工具痕は同一ながら、凹面では布目や模骨痕の有無などで様相が異なる。



第12図 東側調査区の遺構とその出土遺物



第13図 東側調査区遺構外出土遺物

第2表 東側調査区出土遺物観察表

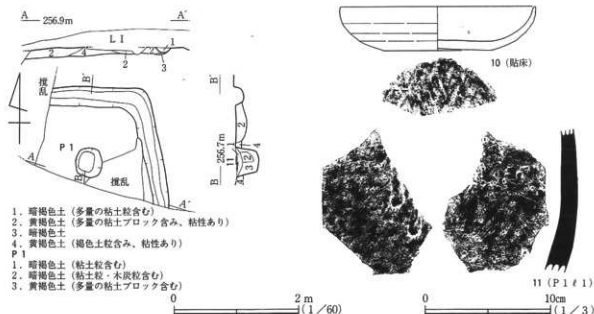
挿図	写真	種類	出土場所	調整・文様・特徴など	色調	焼成	胎土・素地	破片数	備考
1		須恵器高坏	6土坑#1		灰色	良好	密	1	高壁かも
2		縄文土器	3谷C8LII	L R縄文	暗褐色	良好	小石含	1	
3		石甌	3谷B5LII		白色				凝灰岩
4		土師器甕	B5LI	木葉痕	橙褐色	良好	小石含	1	
5		土師器甕	排土	木葉痕・内面黒斑	淡褐色	良好	密	1	
6		須恵器坏	排土		灰白色	良好	密	1	被熱?
7		須恵器甕	排土	内面指押え 外面叩目・ナデ	淡灰色	良好	緻密	1	壺かも
8	○	平瓦	C3攪乱	凹面糸切痕・端部面取 凸面格子叩目	灰白色	不良	密	2	
9	○	平瓦	C3LI	凹面糸切・布目・模骨痕 凸面格子叩目	灰色	良好	小石含	1	

第2節 西側調査区の遺構と遺物

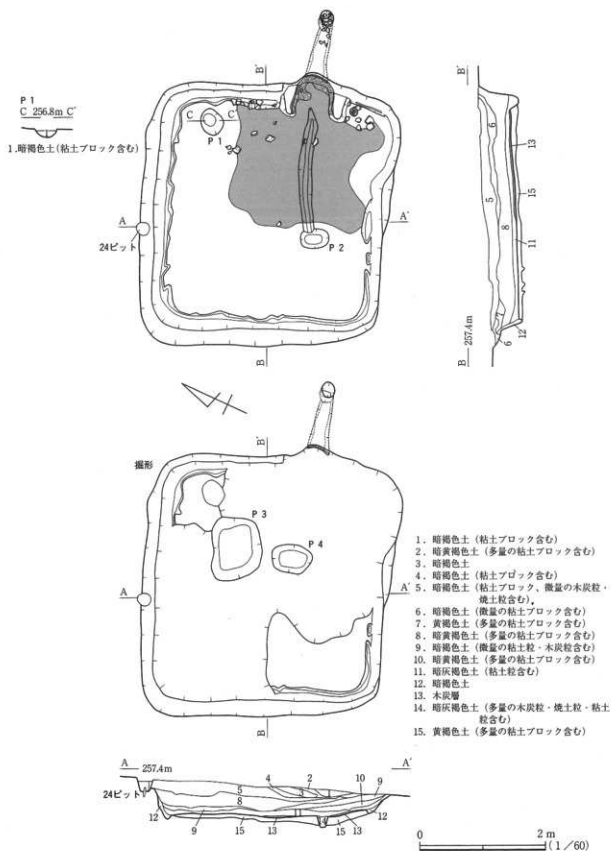
西側調査区は南向きの緩やかな斜面であり、居住適地である。調査区の東端に1谷、同じく西側に4谷の2ヶ所の埋没谷がある。確認した遺構は、堅穴住居が2～3号の2棟、掘立柱建物が5～12号の8棟、土坑が7～12号の6基、ピットが24～28号の5基、溝が12～13号の2条、炭窯が1～2号の2基である。出土遺物は、3号堅穴住居と1谷から比較的多く出土した。出土遺物の数量は、遺構内・遺構外出土のものをあわせ、土器・土製品は接合前の破片の状態では縄文・弥生土器が25点、土師器が1,708点、須恵器が173点、土製支脚が33点、土製有孔円盤が1点、かわらけが1点、近世陶器が7点である。その他に鉄鎌1点、鉄滓2点、石礫1点、粘土塊61点が出土した。粘土塊とした遺物は、被熱して化学変化したもので、何らかの構築物の壁材などの可能性のあるものだが、細片の中には土師器片が含まれている可能性がある。

2号堅穴住居は、調査区南西部のO7グリッドで確認した。北東コーナー周辺が調査区内で、その他は調査区外である。しっかりと掘り込まれた柱穴と壁溝があり、規模は不明ながら定型的な堅穴住居と考えられる。堅穴の床まで完全に削平されており、遺存状態は悪い。確認した床面は全て貼床によって造成されている。

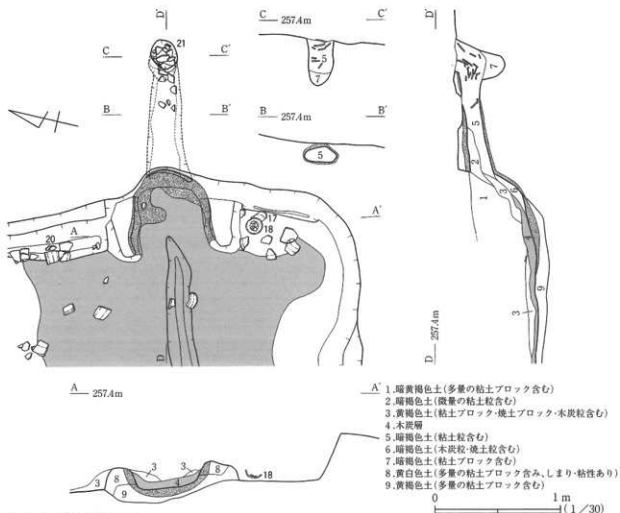
出土遺物は、遺構検出の段階に須恵器甕の破片が6点、近世陶器片が2点、柱穴であるP1の1から須恵器甕の破片が3点、貼床中から土師器坏が1点と土師器甕の破片が3点出土した。そのうち貼床出土の土師器坏とP1の1出土の須恵器甕片を挿図10・11に示した。挿図10の土師器坏は、被熱して器面が荒れているため調整の詳細は不明瞭ながら、整形にはロクロが使用されているようであり、底部外面には静止糸切痕が微かに認められる。丸みをもって立ち上がる体部の形状は、ロクロ不使用の坏の形状と近似しており、ロクロ技術導入期の所産と考えられる。



第14図 2号堅穴住居とその出土遺物



第15図 3号竪穴住居

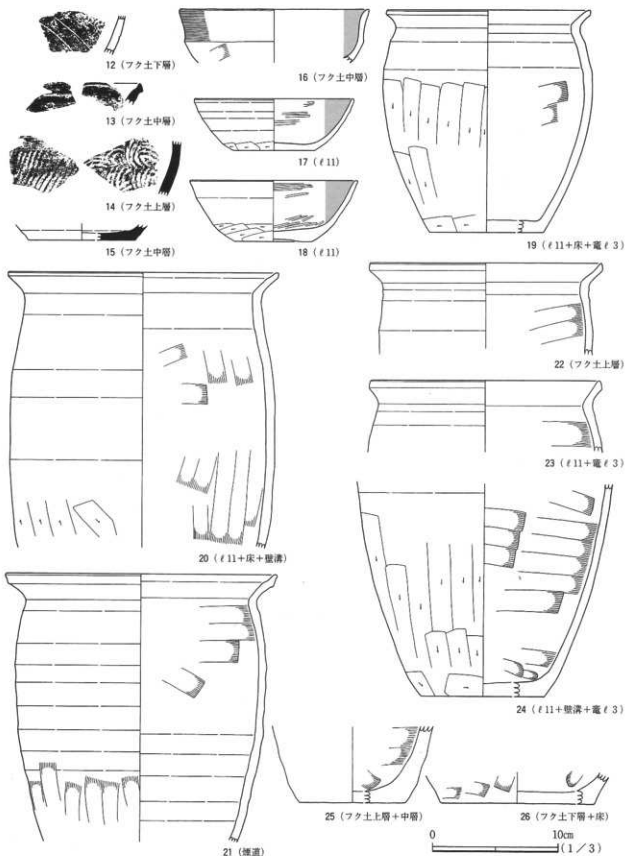


第16図 3号竪穴住居電

3号竪穴住居は、調査区のほぼ中央にあたるO9グリッドで確認した。奈良時代の遺物を包含する4谷Ⅱを掘り込んで構築されている。遺存状態は良好で、竪穴の深さも深い。ほぼ方形の平面形状で、規模は東西約4.1m、南北約3.9mである。24号ピットと重複しており、平面観察によって3号竪穴住居の方が古いことを確認した。

柱穴は存在しなかったが、壁際にごく浅い壁溝が確認できた。壁溝はしっかりとした掘り込みを伴うものではなく、部分的に途切れた場所もある。排水を目的とした施設ではなく、壁板材などの痕跡の可能性もあるかもしれない。竪穴堆積土⑫は関連する土層と考えられる。堆積土は15層に分層できた。このうち⑫15は貼床を形成し、その直上の⑫13は薄い木炭層である。木炭層の存在から、竪穴の廃絶直前に火災があったことが予想できる。竪穴堆積土の主要部を構成する⑫5・8、特に⑫8には多量の粘土ブロックが混入しており、竪穴が人為的に埋められたことが窺える。

竈は東壁に設けられている。東壁の中央から向かってやや右側に偏しており、竈のある東壁となす角になる竪穴南壁の東側が竪穴外に張り出している。竈に関連する空間として利用されていたと考えられる。竈燃焼部の前面からは排水用と思われる溝がのび、その末端はピット状に掘り広げられている。煙道部はトンネル状に掘り込まれ、その先端の開口部はピット状に掘り窪められている。屋外からの水の



第17図 3号竪穴住居出土遺物

浸入を防ぐ工夫とみられる。袖部は比較的良好に遺存していたが、天井部の遺存状態は悪く、故意に解体されている可能性がある。燃焼部の向かって左側の場所から、拳大の川原石が出土した。竈の解体との関連があるかもしれない。

床面よりP1・2、貼床下よりP3・4が確認できた。このうちP2は既述したように竈の排水に関わる施設とみられるが、P1の用途は不明である。P3・4は堅穴掘形が部分的に深くなったに過ぎず、意図的に掘り込まれたものではない可能性もある。

出土遺物は、土器では接合前の状態で土師器片が311点、須恵器片が7点、弥生土器片が1点、粘土塊が6点出土した。図示したのは第17図に示した15点である。これらのうち、遺構に確実に伴う出土状態にあるのは、挿図17～21・23・24・26の8点である。各遺物の詳細は第3表に示した通りである。

5号掘立柱建物は、調査区のほぼ中央部にあたるN9・10グリッドで確認した。東西2間、南北1間の側柱構造で、規模は東西約3.8m、南北約3.4mである。柱穴の平面形状は方形である。P2から挿図27の土器片が出土した。細片のため詳細は不明ながら、内面に黒色処理やミガキ調整の痕跡が認められないことから、かわりではないかと判断した。

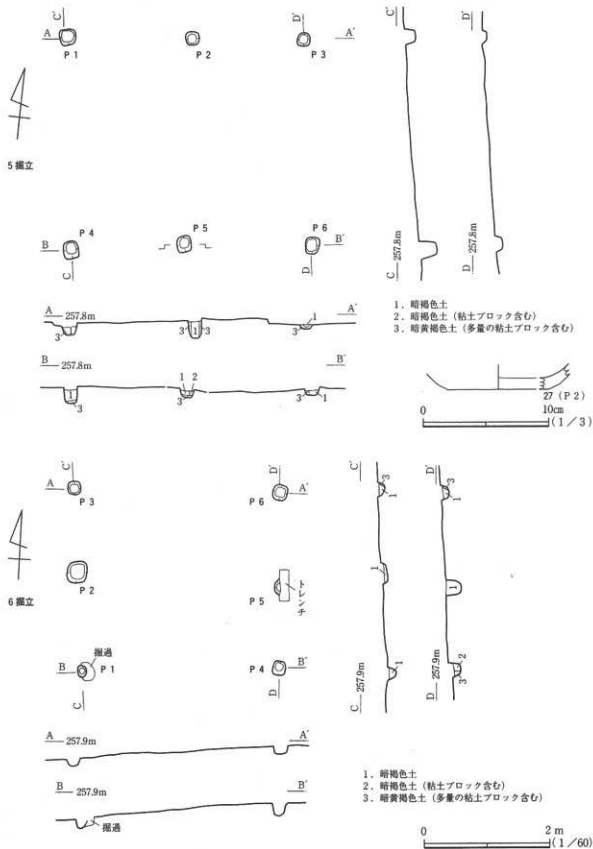
N9グリッドで確認した6号掘立柱建物は、5号掘立柱建物の北西に隣接し、構造や柱穴の形状も近似する。東西1間、南北2間の側柱構造で、規模は東西約3.2m、南北約2.9mである。P6から土師器の細片が1点出土した。

7号掘立柱建物は、調査区北東部にあたるN11グリッドで確認した。東西2間、南北3間の側柱構造で、規模は東西約3.9m、南北約5.5mである。P1・3・6・7・8で、柱を据え替えた痕跡が認められ、P10とP11にも同様の関係が成立するかもしれない。柱穴の平面形状は方形を基調とするものと、そうでないものが混在する。今回確認した掘立柱建物の中では、10号掘立柱建物と並んで規模が大きく、遺構群の中で主となる機能を担っていたことが予想できる。P3から土師器の細片が1点、P8から土師器の細片が2点と須恵器の細片が1点出土した。

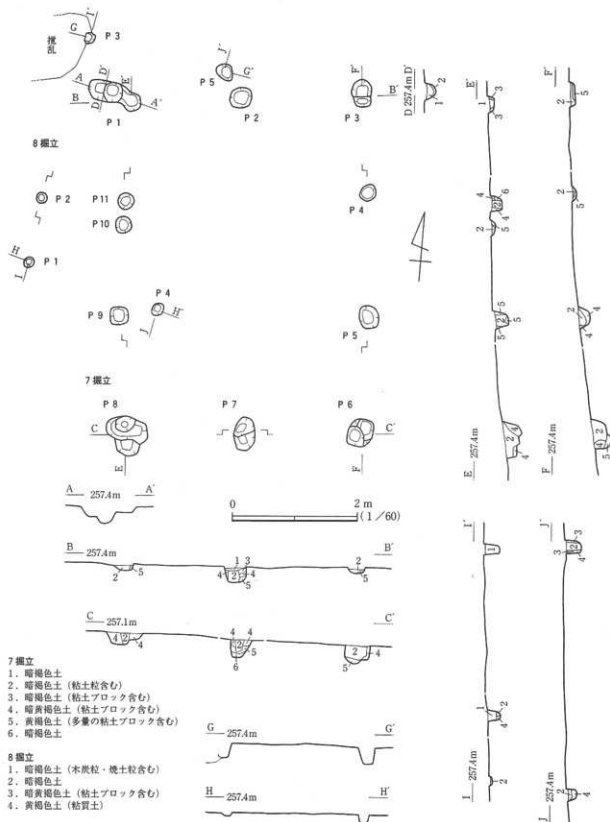
8号掘立柱建物は、7号掘立柱建物とはほぼ同じ位置で確認した。両者は重複関係にあるものの、柱穴そのものの重複がないため新旧関係は不明である。また、P2が10号土坑と重複し、平面観察によって8号掘立柱建物の方が新しいことを確認した。東西1間、南北1間の側柱構造とみられ、規模は東西約2.2m、南北は西側柱列で約3.7m、東側柱列で約3.9mである。平面形状と規模が11号掘立柱建物に似る。P5から土師器の細片が1点出土した。

9号掘立柱建物は、調査区西側にあたるN8・9グリッドで確認した。6号掘立柱建物の西側に隣接する。4谷Ⅱの除去後に確認できたが、極端に浅い柱穴が多いことから、本来はこれを掘り込んで構築されていたと考えられる。東西1間、南北2間の側柱構造とみられ、規模は東西が北側柱列で約3.2m、南側柱列で約3.6m、南北は約2.6mである。南辺の長い台形状の平面だが、構造は6号掘立柱建物に似る。P5とP6で柱の据え替えが確認できた。柱穴の平面形状は方形を基調とするものと、そうでないものが混在する。遺物は出土しなかった。

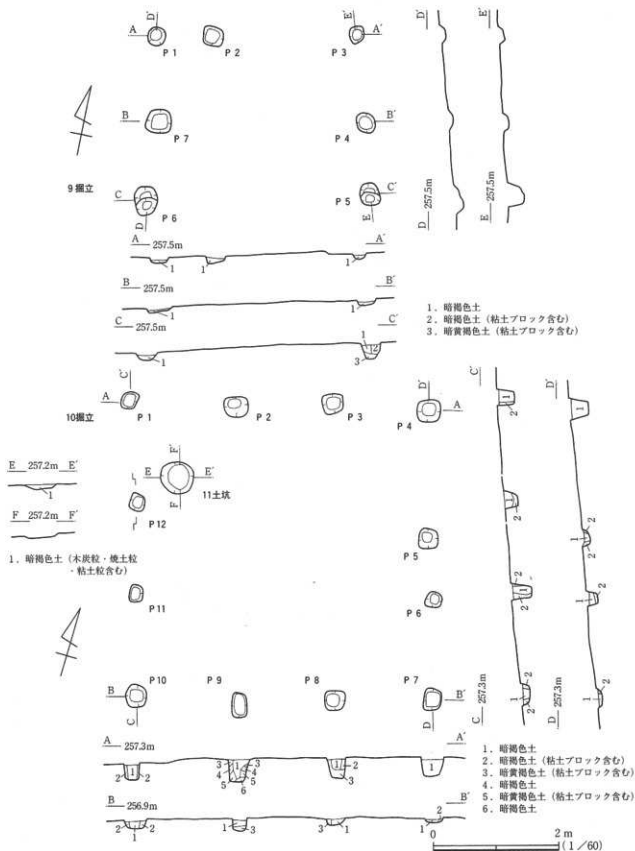
N・O8グリッドで確認した10号掘立柱建物は9号掘立柱建物の南西に隣接し、10号掘立柱建物の北側柱列と9号掘立柱建物の南側柱列の方向がほぼ揃っている。4谷Ⅱの除去後に確認できたが、9号掘立柱建物と同様に、本来はこれを掘り込んで構築されていたと考えられる。東西3間、南北3間の側



第18図 5・6号掘立柱建物とその出土遺物



第19図 7・8号掘立柱建物



第20図 9・10号掘立柱建物・11号土坑

柱構造で、規模は東西約4.8m、南北約4.7mである。柱穴の平面形状は、おおむね方形を基調とする。今回確認した掘立柱建物の中では、7号掘立柱建物と並んで規模が大きく、遺構群の中で主となる機能を担っていたと予想できる。5・6・9・10号掘立柱建物が、広場を囲うようにコ字形に配置されているのも興味深い。P2から甕と思われる土師器の破片が1点出土した。

10号掘立柱建物を構成する柱列内で11号土坑を確認した。円形を基調とする平面形状で、堆積土には木炭粒・焼土粒・粘土粒を含む。確証はないものの、10号掘立柱建物に関連する施設の痕跡かもしれない。甕と思われる土師器の破片が1点出土した。

11号掘立柱建物は、調査区のほぼ中央にあたるO10グリッドで確認した。東西1間、南北1間の間柱構造で、規模は東西約3.5m、南北約1.8mである。平面形状と規模が8号掘立柱建物に似る。遺物は出土しなかった。

12号掘立柱建物は、調査区東側にあたるO11グリッドで確認した。7号掘立柱建物の南に隣接し、その西側柱列と東側柱列の方向がほぼ揃っている。1谷Ⅱの除去後に確認できたが、本来はこれを掘り込んで構築されていた可能性がある。東西2間、南北2間の総柱構造で、規模は東西約3.2m、南北約3.4mである。総柱構造の掘立柱建物に対する一般的な認識に従えば、倉庫として機能したと考えられる。主軸が揃って隣接する7号掘立柱建物と、第1次調査で確認した1号掘立柱建物とで同一の遺構群を形成する。南東コーナーの柱穴は12号土坑によって失われたと判断したが、別遺構として認識した12号土坑が、他の柱穴と比較して規模は大きいものの、柱穴そのものである可能性も否定できない。12号掘立柱建物のP4から土師器の細片が1点、12号土坑から甕と思われる土師器の破片が1点出土した。

7号土坑は、調査区北西部にあたるM8・9グリッドで確認した。4谷Ⅱを掘り込んでいる。多くが調査区外にあるため全体像は不明であるが、円形を基調とした平面を呈するとみられる。堆積土に比較的多くの木炭粒・焼土粒・粘土ブロックを含んでいることから、東側に隣接する1・2号炭窯と関連する遺構かもしれない。土師器坏の破片が1点、土師器甕の破片が1点、須恵器坏の破片が1点出土した。

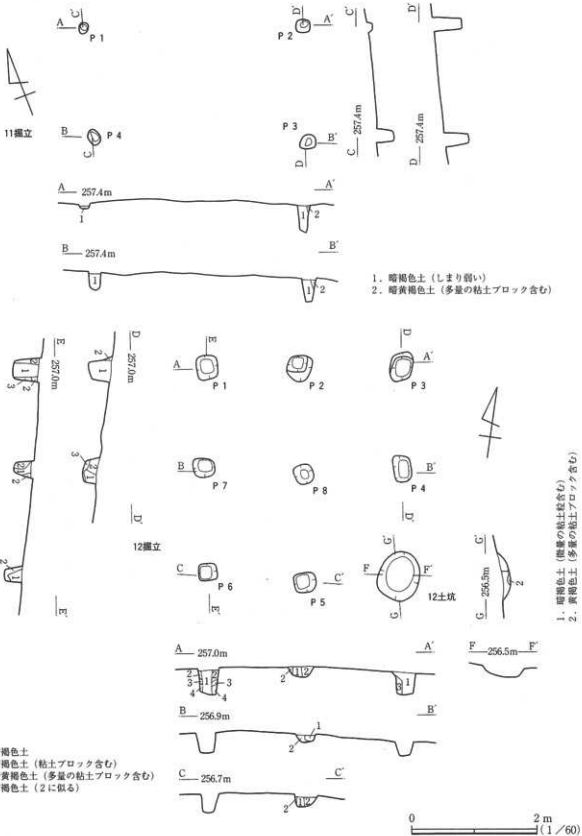
8号土坑は、調査区のほぼ中央にあたるO10グリッドで確認した。挿図28・29に図示した遺物も含め、土師器坏の破片が4点、土師器甕の破片が15点、須恵器甕の破片が2点出土した。

N・O10グリッドで確認した9号土坑は、8号土坑の北東に近接して位置する。円筒形を呈し、堆積土は粘土を基調とし、その様相は他遺構と著しく異なる。遺物は出土しなかった。

10号土坑は、既述したように8号掘立柱建物のP2と重複関係にあり、平面観察によってこれよりも古いと判断した。遺物は出土しなかった。

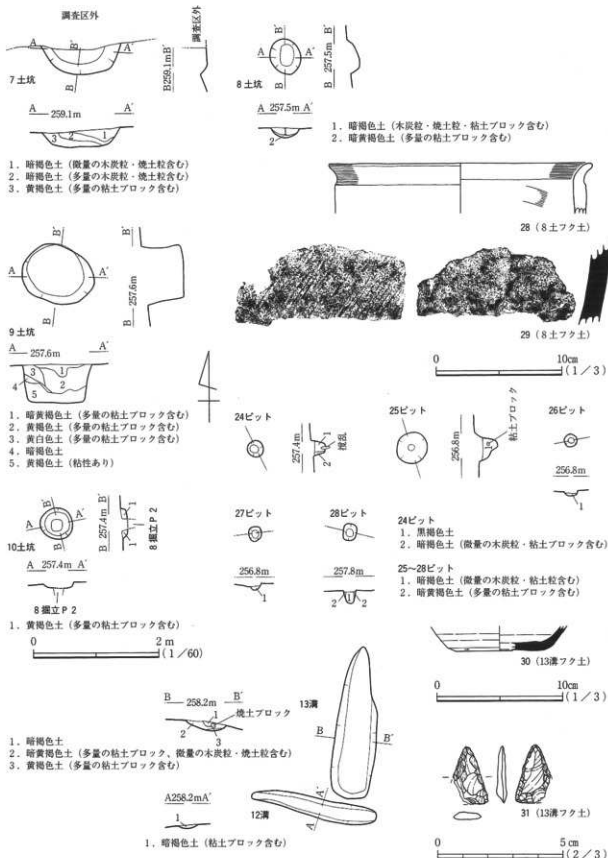
ビットは5基確認したが規則的な配置にあるものではなく、遺物も出土しなかった。既述したように、24号ビットが3号竪穴住居と重複関係にあり、平面観察によってこれより新しいことを確認した。28号ビットは方形を基調とした平面形で、柱痕も認められる。

調査区北東側にあたるN10グリッドで確認した12・13号溝は、長さが短く、溝以外の遺構である可能性もある。両者の位置関係や形状、堆積土の様相などから、1つの可能性として、竪穴住居の壁溝や掘形の痕跡であるかもしれない。13号溝からは、須恵器坏の破片が2点、須恵器甕の破片が1点、石鏃が1点出土した。そのうちの須恵器坏1点と石鏃を挿図30・31として図示した。

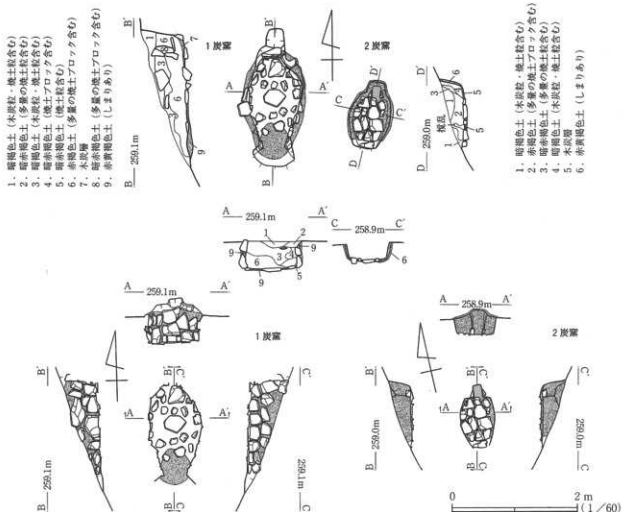


第21図 11・12号掘立柱建物・12号土坑

第3章 調査の成果



第22図 7～10号土坑・24～28号ピット・12～13号溝とその出土遺物

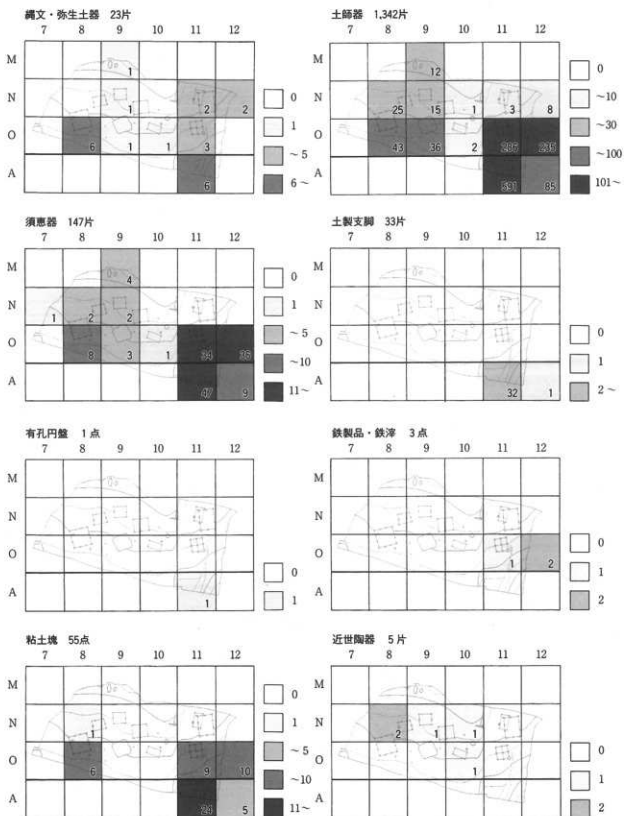


1・2号炭窯は、調査区北西部にあたるM9グリッドで確認した。4谷LⅡを掘り込んで構築されている。側壁や床面は石材や粘土で構築され、石材の用い方や規模に違いはあるものの、基本構造は同じである。2号炭窯から縄文土器片が1点、土師器の細片が1点出土した。

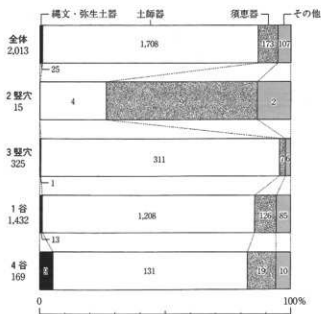
遺構外出土遺物のほとんどは1谷から出土した。遺物の出土地点の平面的な分布状況を、遺物の種類ごとに整理したのが第24図である。近世陶器を例外として、他の全ての種類の遺物が1谷で最も多く出土している。ただし、そのような共通する傾向を前提としながらも、縄文・弥生土器のみは、出土傾向に若干の相違がみられる。すなわち縄文・弥生土器は、4谷においても相対的に多くの数量が出土しており、それをより視覚的に認識するために作成したのが第25図である。図中の全体としたデータは、遺構内出土遺物も含めた出土遺物の総量で、2号竪穴住居と3号竪穴住居のデータは、傾向を比較するための対象材料として示した。ここにみられるように、4谷における縄文・弥生土器の出土比率の高さは明瞭である。

以上のような傾向は、田中遺跡に集落が営まれた中心的な時期である奈良・平安時代に、1谷の堆積土の形成が進んだことを物語られると思われる。また、2号竪穴住居では須恵器の出土比率が突出して高く、

第3章 調査の成果



第24図 西側調査区遺構外遺物出土状況

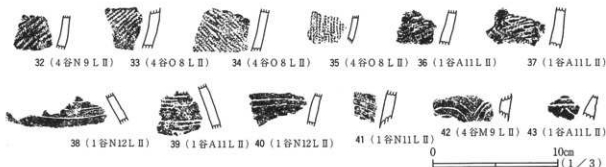


第25図 西側調査区遺物出土傾向

体部が大きく開いて立ち上がる形状であることから甔と判断した。挿図61～84の土師器甔は、いずれも整形にロクロを使用していない。図示した以外にも多くの土師器甔の破片が出土したが、整形にロクロを使用したことが明確なものは認められなかった。挿図85・86は土師質の支脚と思われる土製品で、板状の粘土をまるめるようにして成形している様子が観察できる。

挿図97の須恵器高坏は、坏部の内面が完全に剥落しており、あるいは異なった器形であることも考えられる。須恵質の挿図107は、部分的な遺存ながら有孔の円盤状に復元でき、凸面には自然釉がかかる。穿孔部と側面に自然釉がかからないことから、壺などの破片から作成したと考えられる。紡錘車や祭祀具としての機能が想定できるが、いずれも確証を得ない。第1次調査において、同じ1谷から石製の有孔円盤の出土していることが気にかかる。また、第1次・第2次調査区からは4ヶ所の埋没谷が見つかったが、1谷以外は出土遺物の数量が少なく、1谷における土器の出土量は際立っている。1谷の堆積土には木炭粒や焼土粒が多く含まれており、多量の土器の出土との関連も考えられる。

1谷からは鉄葬が2点出土しており、調査区外に鍛冶関連の遺構が存在した可能性がある。



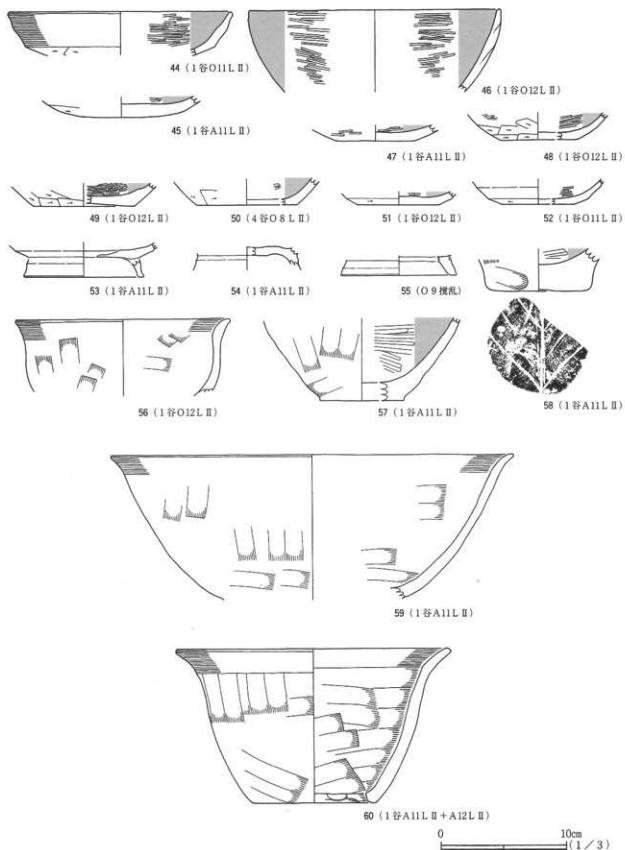
第26図 西側調査区遺構外出土遺物 縄文・弥生土器

3号堅穴住居では逆に須恵器の出土比率の低いこともわかる。このような傾向は、前者が奈良時代、後者が平安時代の堅穴住居であることを反映しているとみられる。

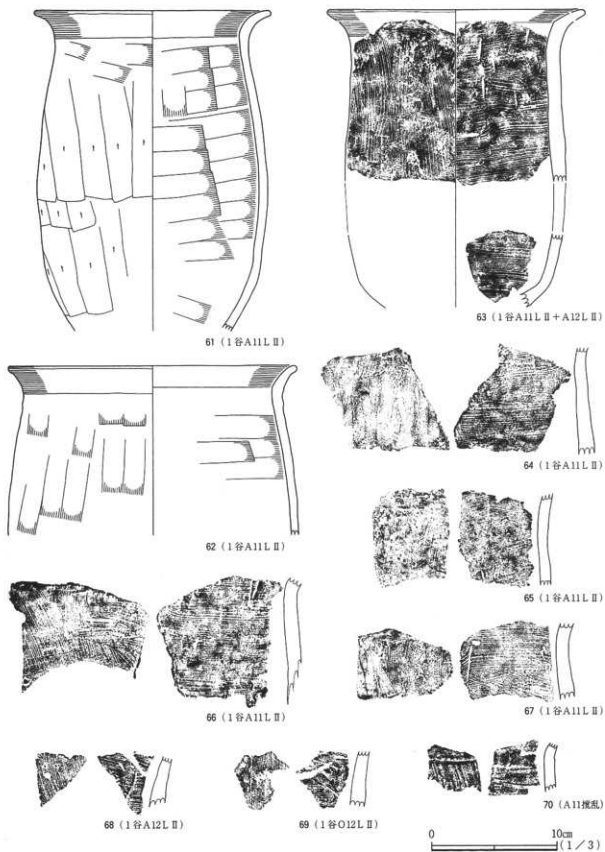
挿図32～43は縄文・弥生土器である。挿図32～35は単節のLR縄文のみが施文され、挿図36・37は不明瞭ながら捺糸文のように観察できる。挿図38～43は平行沈線文が施され、そのうちの挿図38～42は壺と考えられる。挿図38～43の存在を踏まえれば、縄文のみが施されている挿図32～37も、弥生土器の可能性もある。

挿図47・48の土師器坏は、平底であるが整形にロクロが使用されていない。挿図56は、古墳時代中期頃の土師器坏のようにも見えるが、古墳時代の遺物は他に出土していない。挿図59は、

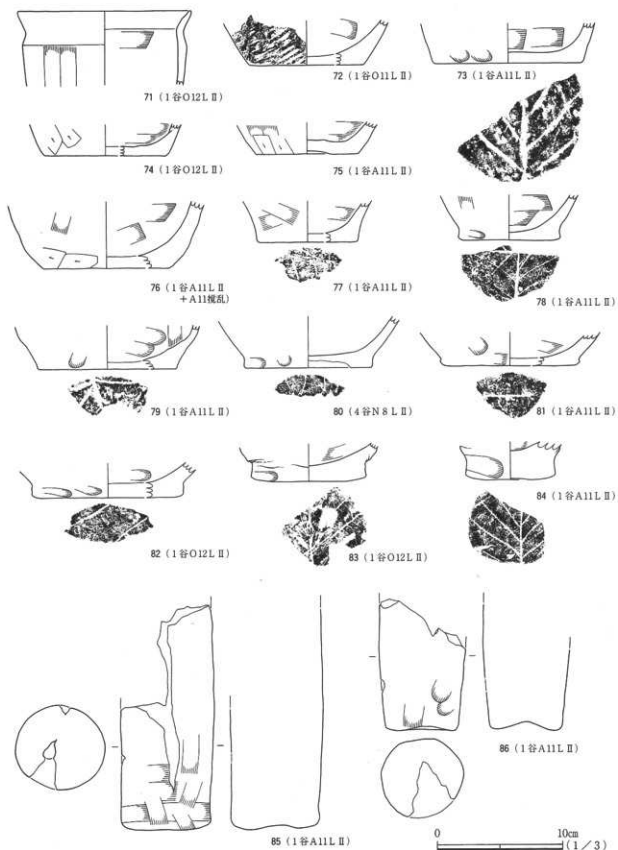
第3章 調査の成果



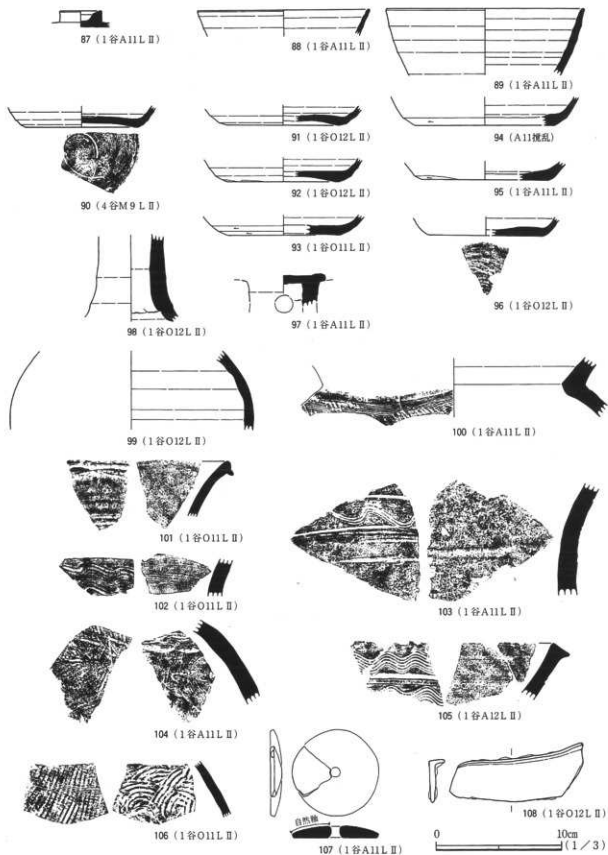
第27図 西側調査区遺構外出土遺物 土師器(I)



第28図 西側調査区遺構外出土遺物 土師器(2)



第29図 西側調査区遺構外出土遺物 土師器(3)・土製文脚



第30図 西側調査区遺構外出土遺物 須恵器・鉄製品

第3表 西側調査区出土遺物観察表

持図	写真	種類	出土場所	調整・文様・特徴など	色調・釉調	焼成	胎土・素地	破片数	備考
10	○	土師器坏	2 堅穴貼床	底部静止糸切不明瞭	淡褐色	良好	小石含	1	被熱・器面荒
11		須恵器甕	2 堅穴 P1 Ⅰ Ⅰ	内面ナデ 外面叩目・軸垂	内面灰色 外面黒色	良好	小石含	1	
12		弥生土器	3 堅穴 フク土下層	平行沈線	暗褐色	良好	密	1	
13		須恵器甕	3 堅穴 フク土中層		灰色	良好	密	1	
14		須恵器甕	3 堅穴 フク土上層	内面叩目 外面叩目・ナデ	灰色	良好	密	1	
15		須恵器坏	3 堅穴 フク土中層	外面底部ナデ	淡灰色	良好	密	1	
16		土師器坏	3 堅穴 フク土中層	内面黒色処理 外面ナデ	内黒 淡褐色	良好	小石含	1	器面荒
17	○	土師器坏	3 堅穴Ⅱ11	内面黒色処理・ミガキ 外面手持ケズリ	内黒 淡褐色	良好	密	6	
18	○	土師器坏	3 堅穴Ⅱ11	内面黒色処理・ミガキ 外面手持ケズリ	内黒 淡褐色	良好	密	1	中に土師器細 片入る
19	○	土師器甕	3 堅穴Ⅱ11+ 床+竈Ⅱ3	内面ナデ 外面ケズリ	褐色	良好	小石含	30	
20		土師器甕	3 堅穴Ⅱ11+ 床+壁溝	内面ナデ 外面ケズリ	褐色	良好	小石含	26	
21	○	土師器甕	3 堅穴煙道	内外面ナデ	褐色	良好	小石含	11	
22		土師器甕	3 堅穴 フク土上層	内面ナデ	淡褐色	良好	小石含	1	
23		土師器甕	3 堅穴Ⅱ11+ 竈Ⅱ3	内面ナデ	淡褐色	良好	小石含	3	
24		土師器甕	3 堅穴Ⅱ11+ 壁溝+竈Ⅱ3	内面ナデ	淡褐色	良好	小石含	16	
25		土師器甕	3 堅穴フク土 上層+中層	内面ナデ	淡褐色	良好	小石含	2	
26		土師器甕	3 堅穴フク土 下層+床	内外面ナデ	褐色	良好	小石含	3	
27		かわらけ?	5 掘立P2		淡褐色	良好	密	1	土師器坏かも
28		土師器甕	8 土坑フク土	内面ナデ	褐色	良好	小石含	1	
29		須恵器甕	8 土坑フク土	内面ナデ 外面叩目	内面灰色 外面黒灰色	良好	密	2	
30		須恵器坏	13溝フク土	外面底部回転ヘラケズリ	灰色	良好	緻密	1	
31		石鏝	13溝フク土		白濁色				石英
32		縄文土器	4 谷N9LⅡ	LR縄文	淡褐色	良好	小石含	1	弥生土器かも
33		縄文土器	4 谷O8LⅡ	LR縄文	淡褐色	不良	小石含	1	弥生土器かも
34		縄文土器	4 谷O8LⅡ	LR縄文	暗褐色	不良	密	1	弥生土器かも
35		縄文土器	4 谷O8LⅡ	LR縄文	明褐色	良好	密	2	弥生土器かも
36		縄文土器	1 谷A11LⅡ	撚糸文?	淡褐色	不良	小石含	1	弥生土器かも
37		縄文土器	1 谷A11LⅡ	撚糸文?	淡褐色	不良	小石含	1	弥生土器かも
38		弥生土器甕	1 谷N12LⅡ	平行沈線	淡褐色	不良	密	1	
39		弥生土器甕	1 谷A11LⅡ	平行沈線	淡褐色	不良	小石含	1	
40		弥生土器甕	1 谷N12LⅡ	平行沈線	淡褐色	不良	密	1	
41		弥生土器甕	1 谷N11LⅡ	平行沈線	褐色	不良	密	1	
42		弥生土器甕	4 谷M9LⅡ	平行沈線	淡褐色	良好	密	1	
43		弥生土器	1 谷A11LⅡ	平行沈線	明褐色	良好	密	1	
44		土師器坏	1 谷O11LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面ナデ・ケズリ	内黒 外面淡褐色	良好	密	1	
45		土師器坏	1 谷A11LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面ケズリ	内黒 外面淡褐色	良好	密	3	
46		土師器坏	1 谷O12LⅡ	内外面黒色処理・ミガキ	内外黒	良好	密	1	

47	土師器坏	1谷A11LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面ミガキ	内黒 外面淡褐色	良好	密	1	
48	土師器坏	1谷O12LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面ケズリ・ミガキ	内黒 外面淡褐色	良好	密	1	
49	土師器坏	1谷O12LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面手持ケズリ	内黒 外面淡褐色	良好	小石含	1	
50	土師器坏	4谷O8LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面手持ケズリ	内黒 外面淡褐色	良好	密	1	被熱?
51	土師器坏	1谷O12LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面回転ケズリ 底部回転糸切	内黒 外面淡褐色	良好	密	1	
52	土師器坏	1谷O11LⅡ	内面ミガキ 外面回転ケズリ	淡褐色	良好	密	3	
53	土師器 高台付坏	1谷A11LⅡ	高台貼付	淡褐色	良好	密	2	
54	土師器 高台付坏	1谷A11LⅡ	内面黒色処理・ミガキ	内黒 淡褐色	良好	密	1	
55	土師器 高台付坏	O9攪乱	内面ミガキ	明褐色	良好	密	1	
56	土師器鉢	1谷O12LⅡ	内外面ナデ	明褐色	良好	密	1	
57	土師器鉢	1谷A11LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面ナデ	内黒 淡褐色	良好	密	2	
58	土師器鉢	1谷A11LⅡ	内面黒色処理・ミガキ 外面ナデ・ハケ	内黒 外面淡褐色	良好	密	1	
59	土師器瓶	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	明褐色	良好	密	12	
60	○ 土師器瓶	1谷A11LⅡ +A12LⅡ	内外面ナデ	明褐色	良好	密	18	
61	土師器甕	1谷A11LⅡ	内面ナデ 外面ケズリ・ナデ	淡褐色	良好	小石含	31	
62	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	内面暗褐色 外面淡褐色	良好	小石含	10	
63	土師器甕	1谷A11LⅡ +A12LⅡ	内外面ナデ・ハケ	淡褐色	良好	密	5	
64	土師器甕	1谷A11LⅡ	内面ハケ・外面ナデ	淡褐色	良好	密	1	
65	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ハケ	明褐色	良好	小石含	1	
66	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ハケ	淡褐色	良好	密	1	
67	土師器甕	1谷A11LⅡ	内面ハケ・外面ナデ	淡褐色	良好	密	1	
68	土師器甕	1谷A12LⅡ	内外面ハケ	淡褐色	良好	密	1	
69	土師器甕	1谷O12LⅡ	内外面ハケ	淡褐色	良好	密	1	
70	土師器甕	A11攪乱	内外面ナデ	淡褐色	良好	密	1	
71	土師器甕	1谷O12LⅡ	内外面ナデ	内面明褐色 外面褐色	良好	密	1	器面荒
72	土師器甕	1谷O11LⅡ	内面ナデ・外面叩目	明褐色	良好	小石含	1	
73	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	褐色	良好	小石含	1	
74	土師器甕	1谷O12LⅡ	内外面ナデ	内面褐色 外面明褐色	良好	密	1	
75	土師器甕	1谷A11LⅡ +A11攪乱	内面ナデ 外面ナデ・ケズリ	内面暗褐色 外面淡褐色	良好	密	1	
76	土師器甕	1谷A11LⅡ	内面ナデ 外面ナデ・ケズリ	明褐色	良好	小石含	3	
77	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	内面灰褐色 外面淡褐色	良好	小石含	1	
78	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	淡褐色	良好	密	1	
79	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	淡褐色	良好	密	1	
80	土師器甕	4谷N8LⅡ	内面漆脈附着 外面ナデ	内面茶色 外面暗褐色	良好	密	3	
81	土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	淡褐色	良好	密	1	
82	土師器甕	1谷O12LⅡ	内外面ナデ	内面黒色 外面褐色	良好	小石含	1	

第3章 調査の成果

83		土師器甕	1谷O12LⅡ	内外面ナデ	褐色	良好	小石含	1	
84		土師器甕	1谷A11LⅡ	内外面ナデ	内面淡褐色 外面褐色	良好	小石含	1	
85	○	土製支脚	1谷A11LⅡ	ナデ	淡褐色	良好	密	16	
86	○	土製支脚	1谷A11LⅡ	ナデ	明褐色	良好	小石含	17	
87		須恵器蓋	1谷A11LⅡ		灰白色	良好	密	1	
88		須恵器坏	1谷A11LⅡ		灰白色	良好	密	2	
89		須恵器坏	1谷A11LⅡ		灰白色	良好	密	1	
90		須恵器坏	4谷M9LⅡ	体部下端調整	淡灰色	良好	密	1	
91		須恵器坏	1谷O12LⅡ	火棒・底部回転ケズリ	暗灰色	良好	密	1	
92		須恵器坏	1谷O12LⅡ	火棒・底部回転ケズリ	灰色	良好	密	1	
93		須恵器坏	1谷O11LⅡ	底部回転ケズリ	灰色	良好	密	1	
94		須恵器坏	A11攪乱	底部回転ケズリ	灰白色	良好	密	1	
95		須恵器坏	1谷A11LⅡ	底部回転糸切	淡灰色	不良	密	1	
96		須恵器坏	1谷O12LⅡ	体部下端調整	灰色	良好	密	1	
97		須恵器高坏	1谷A11LⅡ	脚部透孔	灰白色	良好	密	1	
98	○	須恵器蓋	1谷O12LⅡ	外面自然軸	内面灰白色 外面濃緑色	良好	緻密	3	大戸窯
99		須恵器蓋	1谷O12LⅡ	外面自然軸	内面淡灰色 外面濃緑色	良好	密	1	
100		須恵器甕	1谷A11LⅡ	外面叩目・ナデ 内面ナデ	暗灰色	良好	小石含	2	
101		須恵器甕	1谷O11LⅡ		内面灰色 外面暗灰色	良好	密	1	
102		須恵器甕	1谷O11LⅡ	外面波状文	白色	良好	密	1	
103		須恵器甕	1谷A11LⅡ	外面波状文	内面灰色 外面暗灰色	良好	小石含	1	
104		須恵器甕	1谷A11LⅡ	内面押圧痕・ナデ 外面叩目・ナデ	灰色	良好	密	1	
105		須恵器甕	1谷A12LⅡ	外面波状文	灰色	不良	密	2	
106		須恵器甕	1谷O11LⅡ	内面宛具痕・外面叩目	灰色	良好	密	1	
107	○	須恵貫 有孔円盤	1谷A11LⅡ	凸面自然軸	凸面濃緑色 平面淡灰色	良好	密	1	
108	○	鉄製鎌	1谷O12LⅡ	完形	赤錆色				

第3節 自然科学分析

はじめに

田中遺跡第2次調査では、3号土坑フク土中に黄褐色の軽石が認められた。また、9世紀頃と考えられる3号堅穴住居では、竈内および床面上から炭化材が出土している。本報告では、3号土坑の埋没時期を明らかにするため、フク土の最上層であるℓ1から検出されたテフラの同定を行う。また、堅穴住居における木材利用を明らかにするため、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1. テフラ分析

(1) 試料

試料は3号土坑のフク土上部を構成するℓ1より採取されたシルト混じりの砂1点である。全体的には褐色を呈するが、砂の主体は極粗粒～粗粒砂径の黄白色軽石粒であることが、肉眼観察でも識別することができる。発掘調査所見によるフク土の分層では、ℓ1の下底すなわち直下のℓ3の上面は、土坑の側壁よりやや緩やかな傾きを持ったV字形を呈している。

(2) 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

(3) 結 果

処理により得られた砂分のほとんどは軽石であった。軽石の最大径約1.7mmであり、径1mm前後の軽石が多く、粒径の淘汰度は良好である。軽石は、灰白～淡灰褐色を呈し、発泡は不良～やや不良、角閃石の斑晶を包有するものが認められる。

軽石以外に砂分を構成する碎屑物は、多量の斜長石と少量の不透明鉱物と微量の角閃石および極めて微量の斜方輝石の遊離斑晶であり、いずれも軽石に伴うテフラの本質物と考えられる。

(4) 考 察

検出された軽石は、その特徴と供伴する斑晶鉱物の種類、さらに郡山市周辺域におけるテフラの分布から、古墳時代6世紀中葉に榛名火山の二ツ岳から噴出したとされる榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)に由来すると考えられる。郡山市内では、これまでも各所において今回と同様の特徴を呈するHr-FPの軽石を認めている。

なお、上述したように試料中の砂分にはHr-FPに由来する碎屑物以外の碎屑物はほとんど認められなかった。このことから、試料の採取された1は、土坑内に降下したHr-FPがそのまま堆積風化したような状況が推定される。したがって、3号土坑は、Hr-FPの降下した6世紀中葉にはほぼ半分ほど埋積していた状態であったと言える。

2. 樹種同定

(1) 試 料

試料は、3号竪穴住居の床上木炭層中の炭化材1点と竈内から出土した炭化材1点の合計2点である。

(2) 分析方法

木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、参考文献に掲げた研究を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、参考文献に掲げた研究と独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(3) 結 果

樹種同定結果を第4表に示す。炭化材は、針葉樹1種類(ヒノキ科)と広葉樹1種類(クヌギ節近似種)に同定された。なお、竈内の炭化材には、ヒノキ科の他に広葉樹材も認められたが、細片で保存状態が悪く、同定はできなかった。

各種類の解剖学的特徴等を記す。

第4表 樹種同定結果

遺構	位置	樹種
3号竪穴住居	竪穴床上	クヌギ節近似種
	竈内	ヒノキ科
		広葉樹

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・クスギ節近似種 (cf. *Quercus* sect. *Cerris*)

試料は保存が悪いので、木口の一部を観察したのみであり、電子顕微鏡による観察もできなかった。道管は単独で放射方向に配列する傾向がある。道管壁は比較的厚壁である。道管の穿孔板の形状、壁孔の形態等は観察できない。

道管が単独で放射方向に配列する樹種としては、クスギ節やアカガシ亜属がある。アカガシ亜属は、今回観察したものより道管が大きい傾向がある。また、現在の本地域にアカガシ亜属は自生していないことも考慮すると、今回の試料はクスギ節の晩材部の一部の可能性がありますが、観察範囲が狭く、環孔材であることも確認できていないため、近似種とした。

(4) 考 察

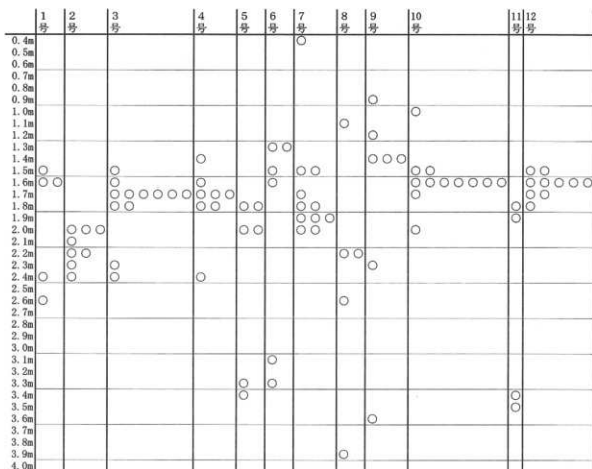
3号堅穴住居の床面から出土した炭化材は、構築材等の一部に由来する可能性があるが、形状等の詳細は不明である。この炭化材は、保存状態が悪いが、道管を有することから広葉樹であり、道管配列の特徴からクスギ節近似種に同定された。クスギ節は、本地域の古墳時代後期から古代にかけての堅穴住居構築材の調査でコナラ節やクリと共によく出土する樹種の一つであることから、本試料がクスギ節である可能性とも矛盾しない。クスギ節の木材は、比較的重硬で強度が高く、構築材としても利用可能であったと考えられる。古墳時代後期から古代にかけて多いコナラ節、クスギ節、クリは、いずれも二次林の構成種であることから、周辺で比較的容易に木材が入手できたことが推定される。

一方、竈から出土した炭化材は、燃料材などの一部が残存した可能性がある。ヒノキ科の他、同定不可能な広葉樹材の破片が認められ、少なくとも2種類の木材が利用されていたことが推定される。古墳時代後期から古代にかけての本地域では、蒲倉古墳群第6次調査の燃料材とされる炭化材にヒノキ科が認められた例がある。また、本遺跡からはやや距離が離れ、地形的にも立地環境が異なるが、小又遺跡の奈良時代の堅穴住居から出土した炭化材の中にヒノキ属が認められた例がある。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれる。いずれも木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。ヒノキ科は山地の根根筋等に生育する種類である。有用材が含まれていること等を考慮すれば、木製品の加工時の木端や廃材等が利用された可能性がある。

第4節 考 察

田中遺跡の発掘調査は、平成19年度に第3次調査が実施される予定である。調査成果の総括はその報告時になされると思われるが、本節ではその階梯として、掘立柱建物について若干の考察を加える。

田中遺跡では、第1次・第2次調査の分をあわせて12棟の掘立柱建物を確認した。掘立柱建物は、堅穴住居や土坑などと異なり出土物が少なく、その構築時期を明確にすることが難しい。田中遺跡の掘立柱建物についても、それは同様である。2・3号掘立柱建物は、東側に隣接する1号土坑がこれらの



第31図 掘立柱建物柱間寸法分布

建物に伴う廃棄土坑の可能性があり、そこから9世紀の土器類が出土したことから、9世紀に機能していたと考えられる。それ以外の掘立柱建物については、構築時期を示す決定的な情報は確認できていない。

そこでまずは、掘立柱建物の柱間寸法に注目して、この問題について検討する。第31図は、1～12号掘立柱建物の柱間寸法を整理したものである。本来ならば、梁行と桁行は区別しなければならないが、1間1間や3間3間、1間2間で正方形を基調とするものなどは、梁行と桁行の別を認識するのが難しい。

第31図にみられるように、柱間寸法には長短の2大別がある。長い方は3m代、短い方は1～2.5m前後で、両者の差は梁や桁といった構造の違いを反映していると考えられる。ここで検討を加えるのは事例の多い後者である。柱間寸法は、大きくは1～2.5m前後にまとまっているものの、建物ごとに微妙なバラツキがある。1号は1.5～1.6m、2号は2～2.2m、3号と4号は1.7m前後、5号は1.8～2m、6号は1.3～1.6m、7号は1.8～2m、8号は2.2m、9号は1.4m、10号は1.5～1.6m、11号は1.8～1.9m、12号は1.5～1.7mにそれぞれ柱間寸法が集中する。これらを大別すると、1.3～1.6mの1・6・9・10・12号の5棟（A群）、1.7m前後の3・4号の2棟（B群）、1.8～2mの5・7・11号の3棟（C群）、2～2.2mの2・8号の2棟（D群）に分けられそうである。A～Dの各群の尺度はおおむね、

A群=5尺、B群=5.5尺、C群=6尺、D群=7尺に換算できる。

既述したように、B群に属する3号とD群に属する2号は9世紀の構築と考えられる。両建物と同じくB・D群に属する4・8号の構築時期が2・3号と同様であるかは確証を得ないが、A・C群に9世紀の構築であることが明らかな掘立柱建物が含まれないことは注意する必要がある。A・C群の掘立柱建物が、9世紀の田中遺跡の集落を構成した掘立柱建物とは異なる尺度を採用していた可能性があり、これらの掘立柱建物の構築時期が、9世紀以外の時期であることも考えられるからである。

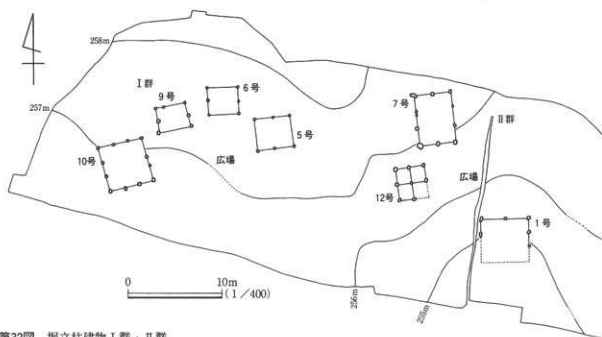
福島県域における中近世の掘立柱建物を集成した成果によれば、掘立柱建物の柱間寸法は、13～15世紀前半には7～8尺を意識しながらもバラツキがあったが、15世紀後半から16世紀中頃には7～8尺にまとまりだすとともに6尺のものが出現し、16世紀末葉から17世紀中頃には6.5尺前後、17世紀末葉には6尺になるという。中近世における掘立柱建物の柱間寸法は、時代が下るに従い狭くなる傾向にあるとされており、このような認識にA・C群をあてはめれば、17世紀末葉以降という年代におちつく。一方で古代の掘立柱建物はこのような傾向には規制されないように考えられるから、A・C群が古代の構築であることも否定できないが、その場合A・C群の構築時期を9世紀以外とした推定とは相容れない。

これらの掘立柱建物が、9世紀の3号竪穴住居と重複しないことを重視すれば、掘立柱建物と竪穴住居が併存して9世紀の集落が形成されていたことも考えられる。しかし第2章第3節や本章第2節で述べたように、5・6・9・10号掘立柱建物は広場を囲うようにコ字形に配置され、その推定広場部分に3号竪穴住居が存在する。集落景観的には、両者は併存し難いように思われる。以上のように、掘立柱建物の構築時期を明らかにするのは難しく、確かなところは識者の判断に委ねざるを得ない。

次に、集落遺跡研究で試みられることの多い遺構群の抽出について検討する。対象とする遺構は、1・5・6・7・9・10・12号掘立柱建物である。第2章第3節や本章第2節で述べたように、これらの掘立柱建物はその占地状況などから、5・6・9・10号（I群）と1・7・12号（II群）の2グループに分けられる。しかしこのグループ抽出案は、あくまでも平面的な分布状況が「そのようにみえる」ということが、ほとんど唯一の根拠である。そこでこの抽出案の妥当性について、それぞれの建物群を構成する掘立柱建物の構造を踏まえながら検討する。

柱間数が多く面積の広い10号掘立柱建物は、I群の主屋的な存在であったと推定できる。柱間寸法は1.6m前後に集中するが、東側柱列のみ数値にバラツキがある。3間の柱間のうち、外側から向かって右側の柱間間隔が長く、中間の柱間間隔が短い。柱間寸法にバラツキがあるのは東側柱列のみであり、このことと10号掘立柱建物の東側に広場が形成されていることが無関係であるとは考え難い。10号掘立柱建物の出入りが東辺に設けられた結果、東側柱列の柱間寸法にバラツキが生じたのではないだろうか。

5・6・9号掘立柱建物は、いずれも1間2間の柱間構成であり、北側柱列に柱穴が3基ある9号は若干相違するかもしれないが、基本的には同様の構造と考えられる。これら3棟の掘立柱建物は、いずれも柱間1間の辺を広場に向けている。柱間の配置が方位的にも一致する6・9号だけでなく、それが一致しない5号も広場へ1間の辺を向けているのが興味深い。これらの掘立柱建物は、梁行と桁行の別の判断が難しく、もとより上屋の構造も不明であるが、広場側の軒が高くなる片流れの屋根構造が想定できるかもしれない。5・6・9号掘立柱建物が広場を意識した構造を有していたとすれば、これらの



第32図 掘立柱建物Ⅰ群・Ⅱ群

建物が併存していた可能性は非常に高いといえる。さらに、これらの建物はいずれも小規模であり、建物群の中で主屋としての機能を担っていたとは考え難い。よって、規模と構造からⅠ群の主屋としての機能が想定できる10号掘立柱建物の付属建物であったことが考えられる。5・6・9号掘立柱建物の用途は明らかでないが、倉庫と想定できる総柱建物がⅡ群に存在するのに対し、Ⅰ群には総柱建物が存在しないことから、そのうちのいくつかは倉庫としての機能を担っていたと思われる。

Ⅰ群ほど明確ではないものの、Ⅱ群を構成する1・7・12号掘立柱建物も、広場を囲うようにコ字形に配置される。1号は、南側柱列が遺存していないために確かな構造や規模は不明であるが、現況では南北規模に対して東西規模が極端に長い。南側に1間分の柱間を想定すると南北規模と東西規模の比率が安定的となるので、本来は東西2間、南北3間の構造であったと推測できる。その場合、1号と7号は面積的にはほぼ拮抗し、Ⅱ群の主屋が1号と7号のいずれであるかは判断が難しい。

12号は2間2間の総柱構造であり、総柱構造の掘立柱建物に対する一般的な認識に従えば、倉庫と考えられる。既述したようにⅠ群には総柱構造の倉庫は存在せず、その点を重視すればⅠ群よりもⅡ群の方が相対的に優位な立場にあったと推定でき、1号と7号がいずれも主屋として機能しうる規模を有していたこととの関連が考えられそうである。とすれば、主屋的な構造と規模を有する1号・7号と、総柱構造のしっかりした倉庫である12号が、Ⅱ群と把握した1つのグループを形成するとした認識にもある程度の妥当性があるといえそうである。

以上のように、占地状況から想定したⅠ群・Ⅱ群の2グループの抽出案は、掘立柱建物の構造上の特徴からも妥当性が高いと思われる。さらに、各群を構成する掘立柱建物が、いずれも広場を形成するように配置されていることは、群を構成する建物が広場を結節点として有機的に関連していたことを窺わせる。

参考文献

第1章～第3章第2節・第4節

- 久保智康『日本の美術394 中世・近世の鏡』至文堂 平成11年
- 郡山市編『郡山市史1』昭和50年
- 郡山市編『郡山市史8』昭和48年
- 郡山市教育委員会編『郡山市埋蔵文化財分布調査報告13』平成18年
- 財団法人郡山市文化・学び振興公社編『田中遺跡』郡山市教育委員会 平成18年
- 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『郡山東部6』郡山市教育委員会 昭和61年
- 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『蝦夷穴横穴群』郡山市教育委員会 平成14年
- 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『小川後田A遺跡』郡山市教育委員会 平成17年
- 服部輝男『七所神社と経塚』私家版 平成12年
- 服部輝男『小川地名・伝承 彼れ! 是れ? 116』私家版 平成14年
- 福島県教育委員会編『福島県遺跡地図 中通り地方』平成8年
- 福島県経塚検討会編『福島県経塚検討会 資料』平成16年
- 福島県考古学会中近世部会編『東北地方南部における中近世集落の諸問題』平成12年

第3章第3節

- 新井房夫『関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層』『考古学ジャーナル157』昭和54年
- 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ』『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所 平成7年
- 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ』『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所 平成8年
- 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ』『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所 平成9年
- 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ』『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所 平成10年
- 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ』『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所 平成11年
- 垣内和孝『郡山市域の事例にみる古代の用材選択』財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『小川後田A遺跡』郡山市教育委員会 平成17年
- 島地謙・伊東隆夫『図説木材組織』地球社 昭和57年
- 早田 勉『六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害』『第四紀研究27』平成元年
- 林 昭三『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所 平成3年
- バリノ・サーヴェイ株式会社『小又遺跡から出土した炭化材の樹種』財団法人福島県文化センター編『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書2』福島県教育委員会 平成10年
- バリノ・サーヴェイ株式会社『自然科学分析』財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『蒲倉古墳群 第6次調査報告』郡山市教育委員会 平成12年
- 町田洋・新井房夫『新編火山灰アトラス』東京大学出版会 平成15年
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. 編 (日本語版監修 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘)『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社 平成18年 [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. 編 (日本語版監修 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩)『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社 平成10年 [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

写真図版



収穫期を迎えた田中の里





(1) 東上空より望む東側調査区



(2) 上空より見下した東側調査区



(1) 北上空より望む東側調査区



(2) 1号竪穴住居



(3) 3号土坑



(4) 5号土坑



(5) 6号土坑



(6) 東側調査区出土遺物 8・9



(1) 西上空より望む西側調査区



(2) 上空より見下した西側調査区



(1) 北上空より望む西側調査区



(2) 南上空より望む西側調査区



(1) 清掃中の2号竪穴住居



(2) 2号竪穴住居



(3) 3号竪穴住居



(4) 掘込開始直後の3号竪穴住居



(5) 3号竪穴住居竪穴断面



(1) 清掃中の3号竪穴住居



(2) 3号竪穴住居北壁際断面



(3) 3号竪穴住居木炭層確認状況



(4) 3号竪穴住居竈



(5) 3号竪穴住居煙道断面



(6) 3号竪穴住居煙道遺物出土状況



(7) 3号竪穴住居竈縦断面



(8) 3号竪穴住居竈右側遺物出土状況



(1) 5号掘立柱建物



(2) 6号掘立柱建物



(3) 7号掘立柱建物



(4) 8号掘立柱建物



(5) 9号掘立柱建物



(6) 10号掘立柱建物



(7) 11号掘立柱建物



(8) 12号掘立柱建物



(1) 7号土坑



(2) 8号土坑



(3) 9号土坑



(4) 10号土坑



(5) 11号土坑



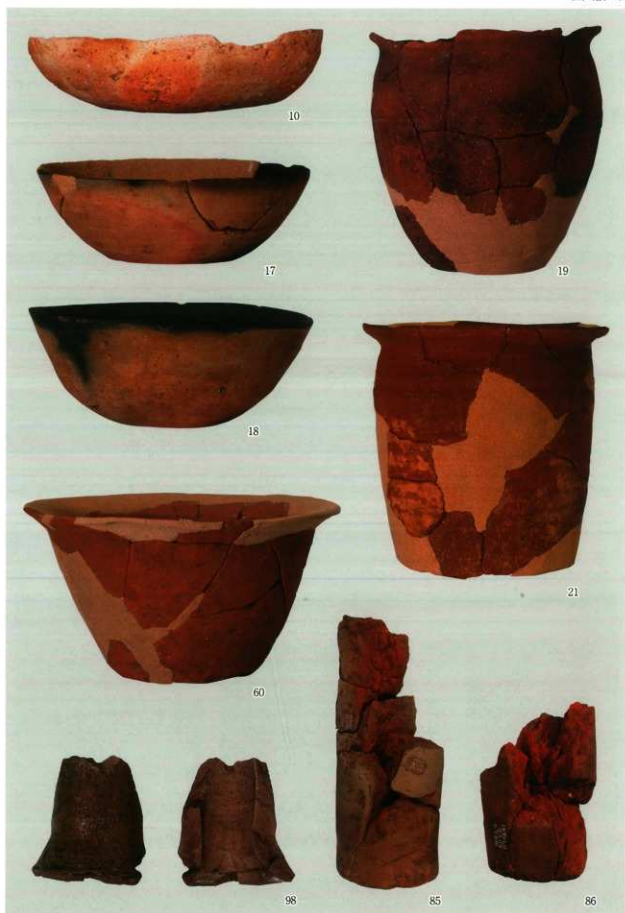
(6) 12号土坑



(7) 1·2号炭窟



(8) 1·2号炭窟截制断面



西侧调查区出土遗物10・17・18・19・21・60・85・86・98



(1) 西側調査区出土遺物107・108



200 μm : a
100 μm : b, c

1. Hr-FPの軽石(3号土坑:1層)
2. ヒノキ科(3号住:カマド内) a: 木口, b: 楕目, c: 板目

(2) 軽石・炭化材

報告書抄録

書名	田中遺跡（たなかいせき）							
副書名	第2次調査報告							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	垣内和孝 高橋同仁 バリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター							
所在地	〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番							TB 024 (959) 3305
発行機関	郡山市教育委員会							
所在地	〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目23番7号							TB 024 (924) 2661
発行年月日	平成19年3月23日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
田中遺跡	郡山市田村町小川字田中	07203	20301034	37° 22′ 00″	140° 25′ 40″	20060802～ 20070323	3,298㎡	市道工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
田中遺跡	狩場	縄文時代	土坑2基	縄文土器・石器				
	集落	奈良・平安時代	竪穴住居3棟 土坑 埋没谷3ヶ所	土師器・須恵器・土製品 鉄製鎌・鉄滓				
		平安時代以降	掘立柱建物8棟 土坑					
	生産地	近代	炭窯2基					
要約	奈良・平安時代の竪穴住居などを確認し、埋没谷からは奈良時代の土器類が多く出土。掘立柱建物の確かな時期は不明で、平安時代以降の可能性がある。							



市道高倉大善寺線道路改築事業関連

田 中 遺 跡

— 第 2 次 調 査 報 告 —

発行日 平成 19 年 3 月 23 日

編 集 財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23

発 行 福島県郡山市教育委員会
〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目23-7

印 刷 共栄印刷株式会社
〒963-0724 福島県郡山市田村町上行合字西川原7-5



